
高校生の恋。

黒蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生の恋。

【Zコード】

Z5181C

【作者名】

黒蝶

【あらすじ】

高校1年生になった佐倉理子。なんとなく選んだ高校で、なんとなく行われた入学式での自己紹介で、室岡尚志の声だけが妙に耳に響いた。最初はただの友達。だけど、いつしか彼の事が好きになつていく理子。でも彼には彼女がいた。友達以上になれない微妙な距離感の中で、切なくもどかしいこの恋は、理子の高校生活そのものでした。

第1話 「入学式での君の声。」

「良い声」の定義なんて全くわからないけど、妙に耳に残つて響いて……
ありふれた言葉を言うだけだったのに、何でもない声だったのに、何かが違うような気がした。
ただそれだけの事だった

私は高校一年生になった。
有名大学への進学率が高いわけでも、卒業後の自分の進路に
合わせて選んだわけでもない。
それなりに勉強すれば誰でも合格できて、尚且つ家から歩いて20分
程度で通える、何の変哲も無いただの高校。
志望動機なんてそんなものだった。

入学式を終えて、それぞれのクラスでは最初のホームルームが
行われていた。
クラスの担任になったのは平原先生といって、お腹がぽっこりと
出た中年のおじさん。
でも、笑うと顔に皺が刻まれておじいちゃんみたいに見える、
そんな人だった。
平原先生は簡単な挨拶をして、ホームルームの後に行われる教科書
購入の会場となっている教室への行き方や、翌日以降の日程などを
淡々と説明した。
ある程度のことは、予め配布されていたプリントにも書いてあった。
そのせいか、その時の平原先生の説明は薄ぼんやりとしか耳に入つてこなかつた。

一通り話し終えて平原先生は、自分の後ろの黒板の真上にある

時計を見上げた。

そして「ふう」と一息吐くと、時間が余ってしまった、と言った。

「せっかくだから自己紹介でもしましょうか。」

おじいちゃんの顔で微笑んだ平原先生が言った。

今時、しかも高校生になつて自己紹介なんて

きっと同じようなことを考えた人は他にもいただろう。

そんな心の弦が顔に表れた生徒がいたのか、先生がふと溢した。
「もしかしたら、自己紹介をさせるために神様がいたずらをして、
時間を余らせたのかも知れないしね。」

神様のいたずら

それは平原先生の最初の教えだつた。

「何を言うのが決まつっていた方が紹介しやすいね。」

そう言つと、平原先生は手元にあつた出席簿を取つた。
結果、出身中学校と名前、そして何でもいいので一言、自分の
アピールを言うことに決定した。

「それじゃあ出席番号順に、青木さんからお願いします。」
神様のいたずらにより、自己紹介は始まつた。

ひとり、またひとりと自己紹介の順番が回つていく。

私はひたすら自分のアピールについて考えた。

趣味は何だとか、何の教科を頑張りたいとか、先に紹介を
し終えた人達はみんなそんなような事を言つていたので、
そんなものでいいんだと思つた。

「 です。よろしくお願ひします。」

自分の前の席の人の自己紹介が終わつた。

パチパチパチ と疎らな拍手が広がる。

いよいよ私の順番になつた。心臓が少し足早に脈を打つ。

「 中出身の佐倉理子です。美術部に入ろうと思っています。よろしくお願いします。」

適當な拍手が舞う中で、私は即座に腰を下ろした。

心臓はまだドクドクと鳴っている。

「ふう。」とさりげなく溜め息をつくと、自分の順番が終わったことの安堵感に私はしばらく浸った。

心臓が平常の速さに戻るまで、それほど時間はかからなかった。もともと氣は進まなかつたけど、言い終えてしまえば何てことはない。

そうしている間にも自己紹介は着々と進み、氣がつけば廊下側からスタートしていた順番は、残すところ窓側の一列だけになっていた。

誰もが自分の事を知つて欲しくて、趣味や目標を公表しているわけではないと思つた。

そんな人も中にはいるかもしれないけど、大半はきっとその場凌ぎ。自分がそうであるよう。

少しずつ終わらへと近づく自己紹介。

窓側から一列目の一、後ろから数えて一番目の席。私からは左斜め後ろの方になる。

その席に座るひとつの少年の順番になつた。

「 中出身、室岡尚志です。中学でサッカー部に入つていて、高校でも続けよつと思つています。よろしくお願ひします。」

そう言つて、彼が腰を下ろす気配が後ろから感じられた。

そして、軽い拍手があちこちから適当に鳴る。

彼の席を、顔を見ていたわけでもなく、ただ正面を向いたまま、

私も周りと同じようなそんな拍手をした。

だけど、自分の左斜め後ろ辺りの声が妙に耳の奥で響いて、何を言ったのかはよく覚えていないのに、彼の声だけが深く印象に残った。

自己紹介のラストは「渡邊」という苗字の人で締められた。平原先生が口を開く。

「みなさんご苦労様でした。今時間が、誰か自分のことを知つてもらうための、誰かのことを知るための一歩となるといいですね。」

先生は出席簿に何かを書き込みながら言った。

最初のホームルーム終了のチャイムが、静かな教室に響き渡る。

「それでは今日はこれで解散となります。教科書購入では買い忘れが無いように気をつけてくださいね。」

その時を誰もが待っていたかのように、椅子を引く音とざわめきが一瞬にして教室中に広がった。

一時間近くにも及んだ最初のホームルームは、多くの人に退屈を『えていたらしい。

「理子、一緒に教科書買いに行こ。」

中学から付き合いのある、クラスで唯一の知り合い井川朋子が、退屈すぎる時間を終えて一息ついている私の席まで来て言った。

「うん、朋ちゃん。」

机の横についているフックに掛けていた鞄を取り、私は立ち上がった。

「行こうぜ、室岡。」

騒音の中から聞こえた言葉に反射的に耳が傾き、やつくりと振り返った。

私は先程、耳の奥で響いた声の主を見た。

はじめて、室岡くんを見た。

第2話 「言葉を交わした下足場」

まだ朝ご飯を食べている最中だところのに、傍に置いていた携帯の着信音が鳴った。

朋ちゃんからのメールだった。

『理子おはよー。古典の現代語訳やってある? もしゃってあつたら[写させて]。アタシ今日あたるの一。』

私はすぐにメールを返信した。

『一応やってあるけど、今日国語一限だよ。[写]する時間ある?』
朋ちゃんはいつも、朝のホームルームが始まる十分か五分前、ほとんどギリギリで学校に来る。ホームルームが終わるとすぐに一限なので、正直ノートを[写]す時間なんてないはず。

『[P]ーしてから行こうか?』くらい書けばよかつた、と私は携帯の表示画面に、『メール送信完了』の表示が出てから思った。再び着信音が鳴った。

『大丈夫。今日一本早いバスに乗るから』

朋ちゃんはバスで通学している。

『八時十五分前くらいには学校に着けると思つから、悪いんだけど理子、付き合つてくれない?』

私は再び返信する。

『わかった。じゃあ私もちょっと早く行くね。』

そう書き込んで私は携帯を閉じた。

時計に目をやると七時二十七分だった。

私は急いで残りのパンを口に詰め込んで、ココアで流し込んだ。ちょっとと苦しかった。

『[P]ーしそうさま。』

そつ言い終えると、私は傍の携帯を掴んで二階の自分の部屋へと走った。

階段を上っている途中でまたもや携帯が鳴る。

朋ちゃんからの折り返しメールだった。

部屋に入つて携帯を見る。

『サンキュー。じゃあ教室で。』

携帯を閉じ、通学用の鞄に押し込めて部屋を出た。階段を勢い良く駆け下りて、私はリビングに向かつた

「いつきます。」

「あら、今日はいつもより早いのね。」お母さんが言った。

「うん。朋ちゃんと待ち合わせてるから。」

そう とお母さんは玄関で靴を履いている私の後ろで言った。

「じゃ、いつきます。」

「いつてらっしゃい。」とこいつお母さんの声を聞いて、私は

玄関の扉を閉めた。

少し急ぎ足で学校を手指した。

学校の校門に着くと七時五十分だった。

生徒が極端に登校する時間帯にはまだかなり時間があつたため、学校の周りは静かだつた。

私は玄関を通り抜け、自分の下駄箱の前で立ち止まつた。

靴を脱いだとした時、誰かが玄関から入つてくる気配がした。

「あ。」

口には出さず、心の中だけで私は言った。

例の室岡くんだった。

「おはよう。」

私のものからは少し離れた位置にある下駄箱の前で、靴を脱いだとしている彼に向かつて言った。

「ああ、おはよう。」

ちらつと私の方に視線をやつて、彼は挨拶を返してくれた。

「随分早いんだね。いつもこんなに早く来てるの?」

「ああ・・・サッカー部の朝練があるから。」

そつか と私が言うと、彼は踵を潰して内履きを履いた。

「じゃあね。」

そう言つと、体育館のある方向へと歩いていった。

パタッパタッという靴の音を、静かな廊下に響かせていく彼の後ろ姿を、私はしばらく目で追つた。

まだ新しさの残る内履きをしっかりと履いて、体育館とは逆の方向にある教室へと私は足を進めた。

教室に着くと、朋ちゃんが待ちくたびれたような顔で席に座つていた。

「理子、遅いよ！！」

「ごめん、これでも急いだんだけど。」

「まあ朝突然言い出した私も悪いんだけど、でも誰もいない教室にひとりでかなり寂しかったんだから。」

まだ八時前の教室に、私達ふたり以外の声はない。

「じゃあこれ古典のノートね。」

鞄の中から一冊のノートを取り出して、朋ちゃんに手渡した。

”サンキュー”と言つと、朋ちゃんはそそくさとノートを写し始めた。

私はその隣の席にそつと腰を下ろし、特に理由もないけど携帯を取り出し適当にいじつて暇を持て余そうとした。

ふと隣から朋ちゃんが声をかけた。

「理子、なんか良いことでもあったの？」

一瞬ドキッとした。

「別にないけど、なんで？」

「ん、なんか嬉しそう。」

そう言つと、朋ちゃんはシャーペンを握る自分の手を早めた。

今日はいつもよつよつと早く学校に来ただけ。

いつもと同じように一日が始まって、いつもと同じように

一日が終わる。

何の変哲も無い日。ただそれだけの「ひとつ。
ひとつ。

高校に入学して一ヶ月。

室園くんとはじめて言葉を交わした。

翌日、朝ご飯を食べ終えてふうつと一息ついてから、時計をちらりと見た。

時計をちらりと見た。

時刻は午前七時三十分

今日は朋ちゃんとの突然の約束のために、早く家を出なければいけなかつた。

で、今ではそんな必要はない。

私は□□アの入ったカツプを両手で持ち、ゆつく

それでもう一度時計を見た。

秒針が「チチチ」と動いている

卷二十一

傍に置いてある携帯を取り、リビングを出て階へ行った。

部屋に入り時計を見ると、七時三十二分。

私は鞄を手に、持っていた携帯を押し込めながら部屋を出て

「行つてきます。」

リビングに顔を出して私は言った。

今田もお友達と約束？

〔 〕

批評家——立川一郎——が「

卷之三

玄関の扉を閉めると、私は急ぎ足で学校へ向

何が目的でこんなにも急いでいるのか、自分でもわからなかつた。

ただそれだけしか頭にはなくて、それだけで足は自然と前に出た。

学校に着くと、時刻は昨日と同じ七時五十分を指していた。

途中走つたりもしたせいか、少し息切れがする。

私はゆっくりと校門を抜け、玄関へと足を進めた。

昨日と同じで人気は無く、とても静かだつた。

私は玄関を通り、自分の下駄箱の前で立ち止まつた。

そして靴は脱がないまま周りを見渡した。

誰もいない。

本当に静かだ。

ふと体育館へと続く廊下にも目をやつた。

そこにも人気はなかつた。

「ふう。」

一息ついてみた。

私、何してるんだろう

そんな考えが頭に過ぎつた。

「キイ・・・バン！バン！ ガチャーン！」

内履きを取り出し、履き替えて靴を下駄箱に仕舞つた。

教室へ行こう

確かにそう思つたはずなのに、いつの間にか私は逆の方向へ歩いていた。

校舎とを繋ぐ渡り廊下通り、辿り着いたのは体育館だつた。その扉は頑丈そうな金属でできつていて、だけど動かすのは意外にも簡単だつた。

私は体育館の扉を少しだけ開けた。

バスケットのゴール、壇上、そして片付けられずに放置されたいくつかのボール達が転がつている。

そこにも人の気配はなかつた。

『そつか。』

心の中で私は呟いた。

体育館の扉を閉めて、私は早足で教室を手指した。

何を期待していたんだろう

第4話 「君の朝 私の朝」

次の朝、七時二十五分に家を出た。

「今日もまた随分早いのね。」といつお母さんに、私は

「なんかこの時間が自分が自分に合ってるみたい。」とだけ言った。

そんな私にお母さんは、”そつか”とだけ言って、それ以上は

聞こうともしなかった。

聞かれても、私自身もその理由をわたってないから困るけど・・・

学校には七時四十五分に着いた。

相変わらず静かで誰もいない。

誰かが来る気配もない。

私は玄関へと向かった。

玄関を通り抜け、とりあえず辺りを見回してみる。

昨日と同じ

私はそう思った。

自分の下駄箱へ足を進めようとした。

「あ、あはよ。」

突然後ろから声がした。

振り返ると、室岡くんがそこにいた。

口から心臓が飛び出るかと思つた

とはまさにこのことかもしれない。

「おはよ。」

そう言って私は下駄箱へと歩いた。

室岡くんが後ろからついて来る。

同じクラスだから当たり前なんだけど、どこか落ち着かない。

「いつもこんなに早く来てんの?」

靴を履き替えている途中で、室岡くんが言った。

「私は 昨日学校に辞書忘れちゃって、今日当たるといひ予習してなかつたから・・・」

嘘だつた。

辞書を忘れてなんかいないし、予習も一応してある。

なんでこんな事言つてんだろ?「私は

ふうん とだけ室岡くんが言つ。

「朝練つて毎日あるの?」私が聞いた。

「ううん、火曜と木曜だけ。」

そう言えれば、朋ちゃんからメールがきた一昨日は火曜日だった。

意味もなく早く家を出た昨日は水曜。そして今日は木曜日

『そりだつたんだ。』

私はまた心の中で言つた。

内履きに履き替えた彼は、下駄箱の扉を閉め歩き出した。

「じゃあね、佐倉さん。」

そう言つと、体育館へと続く廊下を進んでいった。

相変わらず踵をつぶし、パタツパタツという靴音を鳴らしている。

そんな彼の後姿を、心臓を足早に脈打たせながら見送つた。

その時の室岡くんの声も、しばらく耳の奥で響いていた。

第5話 「新しい友達。」

「理子ちゃんつていつも朝早いよね。」

利用者の少ない朝の図書室で、適当な本をパラパラとめくつての私に隣に座る由美ちゃんが言った。

同じクラスで図書委員の松本由美ちゃんは、週に何度か朝の図書室の管理当番の仕事がある。

当番といつても、やることは本を借りたり返したりする際の手続きくらいで、しかも朝は利用する人が本当に少ないため、由美ちゃん曰くとにかくヒマらしい。

「由美ちゃんだって朝早いじゃん。」

「でも前は私が一番だったのに、最近は理子ちゃんの方が早いよ。」あれから私は、毎日八時前には学校に来ている。

火曜と木曜はサッカー部の朝練がある。

それを目的としているわけでも、火曜と木曜だけ早く来たいと思つてはいるわけでもない。

ただなんとなく早く来てしまう。それだけのことだった。

室岡くんと話せるとか、そんな考えはどこにもなくて、火曜と木曜でも彼に会わない日はあるし、そんな時はさつさと教室に行つてしまつ。

それでも何とも思わなかつた。

由美ちゃんと仲良くなつたのは、ある朝、誰もいない教室でひとり英語の訳をしていた時だつた。

突然教室の扉が開くガラツという音がした。

入り口に視線をやると、ひとりの女の子が入つてきた。

「おはよう。」彼女は言つた。

「おはよう。」と私は返した。

同じクラスの松本さんだつた。

「佐倉さん、朝イチに学校に来て勉強なんて偉いね。」

松本さんが言った。

「そんなことないよ。暇だつたからやつてるだけで、頭になんて全然入つてないし。」

そう言つと、松本さんは「そういうのわかるかも。」と言つた。

「松本さんこそ随分早いね。」私は聞いた。

「私は図書委員で当番があるから。」

松本さんは自分の席の机の横にあるフックに、手にしていた鞄を掛けた。

「じゃあ私、図書室に行くから。」

そう言つて、彼女は教室を出て行つた。

それ以来、何度か朝の教室で言葉を交わしていくうちに、私達は”由美ちゃん””理子ちゃん”と呼び合つよつになつた。

私が由美ちゃんについて、早朝の退屈な時間を図書室で過ごすよつになつたのは、由美ちゃんが何気なく言つた一言からだつた。
「よかつたら理子ちゃんも図書室に来ない？」

その時私は、家から持つてきた雑誌を読んでいた。

「でも、邪魔じゃない？」

「全然。むしろしてくれた方が私は嬉しい。」

「なんで？」

「来てみればわかるよ。」

そう言つと、由美ちゃんはフフツと笑つた。

「じゃあ行こうかな。」

そう私が言つと、由美ちゃんは”ヤツタワー”と言つて両手を真上に挙げた。

そしてふたりで教室を出た。

職員室で図書室の鍵と数冊のファイルを由美ちゃんが受け取つて、私達は図書室へと向かつた。

由美ちゃんが器用に図書室の鍵を開ける。

扉が開いて中に入ると、いかにも図書室らしい空気と、本の匂いが漂ってきた。

由美ちゃんは、カウンターと呼ばれるところに私を招き入れてくれた。

ふたりきりしかいない図書室で、私と由美ちゃんはお互いのことをひたすら話した。

中学はどんな感じだったとか、携帯の機種は何だとか、そんな他愛もないことばかりだった。

由美ちゃんは眼鏡をかけていて、一見ガリ勉タイプ系の子だつたけど、

話してみると楽しくて、すごく良い子だと思った。

由美ちゃんが”来てみればわかる”と言つた意味はすぐにわかつた。私達が図書室にいた三・四十分の間に、中に入ってきたのは五・六人。そのうち返却・貸し出しを利用したのはたつたの一人だった。由美ちゃんが言つには、ひどい時は誰も入つてこない日もあるらしい。

由美ちゃんの当番は毎日じゃない。

彼女の当番のない日、私はしばらくの間教室でひとりで過ごす。そんな時間は悪くはなかつた。

私は朝早くの学校が好きだと思った。

第6話 「明日から夏休み。」

「全員、通知表は受け取りましたか？」

多少のざわつきが絶えない教室で、平原先生がいつもより少し声を荒げながら言つ。

先生が教壇に立つてゐる時、いつもなら教室内はもっと静かなのに、今日はそんな空氣はどこにもなかつた。

みんなが浮かれるのも無理はないとと思う。

外では太陽が高々と昇り、燦燦と照つてゐる。

気温はきつと三十度を上回つてゐるだろう。

おかげで蝉もあちこちで鳴いてゐる。

明日から夏休み

初めての通知表は、まだ多くの箇所に空欄があつて、新鮮だつた。ひと通り田を通していると、チャイムが鳴つた。

「それではみなさん、良い夏休みを過ごしましょう。」

そう平原先生が言つと、教室中は一斉に騒ぎだした。

今日は午前中で学校が終わりになるので、午後から遊びに行く話し合いをみんなしているんだろう、などと思いながら、私は荷物を整理した。

「理子。」

朋ちゃんが由美ちゃんとさやかといつしょにやつてきた。

朋ちゃんと同じ吹奏楽部の「科さやかは、朋ちゃんが”同じ部活なの”と話してくれたことがきっかけで仲良くなつた。

「これからみんなで遊びに行こうって話してたんだけど、理子も行くでしょ？」

朋ちゃんが言つた。

「ごめん、私これから部活なんだ。」私は言つた。

「え、理子ちゃん部活なの？残念ー。」と由美ちゃんが言つ。

「せっかくみんなで盛り上がりとゆつたのに。」

と言つたさやかは、”サボつちゃえ”とまで言つてきた。
「コンクールとかあって、課題がいっぱいあるんだよね。」
私が言う。

正直、みんなと遊びに行きたかった。

だけど、八月の月中旬が締め切りのコンクールに出品する予定の
絵の出来が、全くと言つていい程進んでいなくて、まだ下書き
さえもしていない状況だった。

他にも、夏休みの課題として描かなければいけない絵もある。
夏休み中に集中してやろうとも思つたけど、この炎天下の中、
頻繁に学校に通うのは嫌だった。

それに、なんといつてもせつかくの夏休み。

それを絵ばかり描いて過ごすのはごめんだと思い、終業式の
午後はそつちを優先しようと前々から決めていた。

「ホントごめん。その変わり夏休みはいっぱい遊べるから。

「海とか行きたいよねー。」さやかが言つた。

「私水着持つてないよ。」と朋ちゃん。

それから私達は、どこへ行きたいとか、何がしたいかななどを
話し、その中のいくつが実行されるかわからないが、最終的
には”メールするから”という一言で収められた。

「じゃあね、理子。部活頑張ってね。」と朋ちゃんが言つた。

「うん、ばいばい。」

手を振つて私はみんなと別れた。

家から持つてきたお弁当で昼食を済ませ、私はそのまま美術室
で時間を費やした。

やつとの思いで何とか下書きだけでも完成させると、私は

「ふーっ」と大きく息を吐いた。

時計を見ると四時三十分だった。

初めは何人かいた美術部員も、ひとりふたりと帰つて、
気づけば自分だけになつていた。

私は道具を片付け、描きかけの絵を邪魔にならないように端に避けて美術室を出た。

鞄を教室に置いたままにしていた。

教室までの廊下や階段はどこもひつそりとしていて、生徒の気配がほとんど感じられなかつた。

まるで朝の学校みたい・・・

教室に入ると、ポケットに入れていた携帯のバイブがブルブルと鳴つた。

さやかからメールが来た。

『理子、部活終わつた？私達これからご飯食べに行くんだけど、理子も行かない？』

私はすぐに返信した。

『ありがとうございます、もちろん行くよ。』

さやかからみんなとの待ち合わせ場所を聞くと、私は自分の家に電話をかけた。

家の電話にはお母さんが出た。

『これから友達とご飯食べに行きたいんだけどいいかな？』

『いいけど、あんまり遅くならないように帰つてくるのよ。』

電話の向こうでお母さんが言つた。

私は「わかつてる」と言つて電話を切つた。

机の横の鞄を取り、携帯を押し込めていた時だつた。

「ガラッ。」

教室の扉が開いた。
私は視線をやつた。
室岡くんだつた。

「あれ？」と室岡くんは言つた。

「佐倉、まだいたの？」

私への呼び方は、いつの間にか“佐倉”になつていた。

「うん、部活だったから。」

「室岡くんは”そっか”と叫び、ゆっくりと歩き出した。

「室岡くん」などうしたの?」私が聞く。

「ああ、さっきまで部活だったんだけど、なんか財布忘れたみたいで……」

そう言いつと、彼は自分の机の中を手で探つた。

「お。あつたあつた。やっぱこいつだつたか。」

ほつとしたような様子を見せて、室岡くんは財布を、持つていた鞄の中にしまつた。

「見つかってよかったです。」

私は言った。

「つづーか気づいてよかったです。この後メシ食いに行くの、それまで気づかなかつたらかなりヤバいくことになつてただろ?」

「そうだね」と私は言った。

「それじゃあ私はこれで。」

そう言つて、私は鞄を手に教室を出よつとした。

「あ、待つて。」

彼の一言で、ドアが止まつた。

第7話 「黄昏と君と初メール。」

「佐倉のアドレス教えてくんない？」

室岡くんが言った。

「え？」

正直驚いた。

彼からそんなことを言われるとは、思つてもいなかつた。

「夏休みだから、クラスの男子女子で遊んだりしたいって友達が言つててさ、でも誰も連絡先知らないから。」

それつて、別に私じゃなくてもいいんだよね
なんて考えが一瞬頭を過ぎつた。

「そうだね、そんな風にも遊びたいね。」私は言った。

”だろ？”と言つと、彼は自分の机に座つた。

私は携帯を取り出した。

開いて、自分のメールアドレスと番号が登録してあるデータを表示画面に映すと、携帯をそのまま彼に差し出した。

「じゃあこれ、私の番号とアドレス。」

「おっ、サンキュー。」

そう言つて、室岡くんが手を伸ばす。

その時、少しだけ彼の指に触れた。

ドキッとした。

室岡くんは自分の携帯を開き、指を懸命に動かしてボタンを押していた。

そんな彼の姿を、私はすぐ傍でただじつと見ていた。

西日が教室を照らし、室岡くんが少しオレンジ色に染まつている。

「これで合つてる？」

しばらくして室岡くんが言った。

自分の携帯を翳して私に見せる。

並べられたいくつものアルファベットに、私は目を通した。

「うん、たぶん合つてるとと思つ。」

「じゃ、これ返す。」と言つて、彼は私の携帯を渡した。

彼から返された携帯は少し温かくて、なんだか心地良かつた。

「今からちょっと送つてみるから。」と室岡くんは言つた。

しばらくして、私の携帯がブルブルと音を立てた。

メールボックスを開くと、見たことないアドレスと、本文には同じく見たことない番号が書かれていた。

「届いた?」

「うん。」

「俺の、登録しといてね。」

室岡くんが言つた。

メモリーの「む」の欄に、”室岡尚志”といつ名前が登録される。きっと、彼の携帯の電話帳の「せ」の欄には、”佐倉理子”といつ名前が刻まれている。

なんだかくすぐつたいたのを感じた。

「じゃ、俺帰るわ。」

室岡くんが立ち上がつた。

「うん、じゃあね。」

彼はスタスターと出入り口に向かつて歩いていく。

「気をつけて帰れよ、佐倉。」

やつれて室岡くんは教室を出て行った。

夜、お風呂からあがつて、部屋で一息つきながらふと携帯を開いて

みると、”メールあり”の表示があつた。

こんな時間に誰だろう

と思いながら、メールボックスを見る。

室岡くんからのメールだつた。

『夏休み、部活あつたりする?
私はすぐに返信した。』

『部としての活動はないけど、課題の絵描きに学校には行くよ。』

思つていたより、メールはすぐに返つてきた。

『俺もほとんど部活だよ。もしかしたら学校で会うかもね。』

私は一言、『そうかもね。』と送つて携帯を閉じた。

それから返信は返つてこなかつた。

室岡くんとの初めてのメールのやりとりは、案外短時間で終つた。

まだ生乾きの髪を、私は急いでドライヤーで乾かした。

もう口付も変わつている時刻。

そのままベッドに入り、電気を消した。

目を閉じると、自分の心臓の脈動の音が聞こえた。

それは驚くほど素早く、静かな部屋中に響き渡るへりこでキドキと鳴つていた。

第8話 「夏の約束。」

夏休みに入つてすぐ、室岡くんから突然メールがきた。
アドレスを交換した日の夜以来だつた。

『今度の週末、予定あいてる?』

突然のメールにも驚いたけど、メールの本文にも十分驚いた。
予定を聞くなんて

私は何かを期待した。その何かはわからなかつた。

『私はあいてるけど、どうして?』

私は返信した。

『林たちと海でバーベキューしようって言つてるんだけど、佐倉と、
佐倉の仲良い女子も、都合よかつたら一緒に行かない?』
そういうことか

私はふと思つた。

『聞いてみるよ。男子は誰がいるの?』私が送る。

『俺と林と塚田と陣内。』と室岡くんが送つてきた。
そこに書かれていた苗字は皆、同じクラスの人達だつた。
高校に入学して四ヶ月。さすがに顔と名前だつて一致する。
『じゃあ、また連絡するから。』

そう私が送ると、室岡くんは”OK”の一言だけ返信してきた。

朋ちゃんと由美ちゃんときやかに、室岡くんからのメールの内容を話すと、何気にみんなノリ気だつた。

朋ちゃんは、”そういうの憧れてたの!!”と言い、ときやかは”こんなチャンスは滅多にない”と言つた。

由美ちゃんは穏やかに、”おもしろそう”と言つた。

私はすぐに室岡くんに、報告のメールを送つた。

『わかった。じゃああいつらに言ひとく。』 という返事がきた。

『うん。でも、私達まで参加して本当にいいの?』

『全然いいって。クラスの男女の仲を深めよつて林が言つてたし。

』

それは私達じゃなくてもいいのかな

仲の良い女子ができるならだれでも良くて、たまたま私と室岡くんがアドレスを交換し合つた事がきっかけになつただけで、もしも交換したのが私じゃなくても、きっと彼は同じことを言つたのだろう。

『また詳しい予定が決まつたら教えて。』

と私は返信した。

”了解”といつ室岡くんからの返事に、なんだかモヤモヤした。

なんだらう、この気持ち

私はベッドに仰向けに寝転がつて、天井を見つめた。

次の日、私は午前中を学校の美術室で過ごした。

夏休みになつてまで早起きするのもどうかと思つたけど、日が高くなるにつれて暑さも増すだらうと予測し、朝の涼しいうちに事を終わらそうと思つた。

だけど予測はハズした。

朝からジリジリと焼けるように暑く、美術室の窓を全開にしてもちつとも風は入つてこなかつた。

そんな異常な気候と戦いながら、私は筆を持つ手を動かした。

正午近くになると、さすがに耐えられなくなり、集中力もブツリと切れた。

暑い

誰もいない美術室で、私はひとり呟く。

これ以上こんな所にはいられない。

そう思い、私は使った筆やら絵の具やらを片付け始めた。手を洗おうと捻った蛇口から出る水が気持ちよかつた。描きかけの絵を端に寄せると、鞄を手に私は美術室を出た。廊下の方がいくらかは涼しかった。

下足場で、靴を履き替えようとしていたとき、どこかから声がした。

「佐倉」。

振り向くと、室岡くんが歩いてきた。

「なんか見たことがある後ろ姿だと思つたら、やっぱ佐倉だつたな。」
「彼が笑いながら私を横切る。

「今日は部活だつたの？」

靴を履き替えている最中の室岡くんが言つた。

「うん。でも部活つていうより、課題になつてゐる絵を描きにきただけなんだけどね。」私は言つた。

「絵、上手いの？」

室岡くんは聞いた。

「上手いかどうかはわかんないけど、絵を描くのは好き。」「ふうん」と言つと、彼は下駄箱の扉をカタン、と閉めた。

「そういえば昨日の話だけど」

思い出したかのように彼が言つた。

「日曜の朝九時に駅に集合つてことになつたんだけど、いい？」
「わかつた、伝えておくよ。道具とか材料はどうするの？」
「道具は男子が分担して持つていくし、材料は、なんか海岸の近くにスーパーがあるらしくて、そこで買つつてさ。」「そつか」と私は言つた。

「なんか男子に任せてばっかりで悪いね。」「そう言つと、室岡くんはハハツと笑つた。

「そんな事ないって。それに女子には料理のときには任せらじ。」「

室岡くんが横目で見る。

「えっ・・・・私、ヘタだよ。」

そう言つと、室岡くんは大きく笑つた。

「それ、いろんな意味で楽しみかも。」

私はフツと笑いを溢した。

室岡くんを見ていたら、私まで可笑しくなつて、つられて笑つてしまつた。

彼の笑い声が、耳を突き抜け、胸の奥にまで響いた。

第9話 「それは一瞬の出来事。」

「「」の焼きそばスゲー美味くない？」

そう言つたのは塚田くんだった。

「これでもかといふくらい高く昇つた太陽は、焼けるほどに浜辺を照らし、絶好のバーべキュー日和となつた。

「理子つて料理上手だつたんだね。」さやかが言つ。袋に書いてあつた作り方の通りにやつただけだよ。

たまたま作つた焼きそばが、妙にみんなの好評を得た。

「いや、今まで食つた中で一番美味いって！－」

と大袈裟な言い方をしたのは陣内くんだった。

「仁科には絶対できないよな。」

そう林くんが言つと、本日何度田かのさやかとの言い合いが始まつた。

さやかと林くんは、小学校からの知り合いで、昔から小競り合ひが絶えないらしい。

ふたりの間に恋愛感情と呼ばれるようなものは無く、言わば”腐れ縁”というやつだとさやかは言つた。

みんな、また始まつたよ などと言いながらふたりの

やりとりを茶化していた。

そんな彼らを、ただの腐れ縁だけじゃないような気が私は

していたけど、案外みんな同じ事を思つてゐるかもしがれない。

私はチラリと室岡くんを見た。

缶ジュースを片手に笑つてる。

なんだか嬉しかつた。

「あれ、ウーロン茶もつ無いや。

朋ちゃんが言つた。

「あ、じゃあ私買つてくるよ。」

私が立ち上がりつて言った。

「ひとりで大丈夫？」由美ちゃんが言った。

「スーパーすぐそこだから平気だよ。ちょっと待つてね。」

そう言って私は歩き出した。

砂浜から道路へ出る階段を上り、車が行き来する車道に出ると、私は向かいの歩道に渡るために左右を見渡した。

「佐倉一。」

後ろから声がした。

振り向くと、室岡くんが階段を上つてきていた。

「荷物、重たいだらうから俺も一緒に行くよ。」

彼は少し息を切らしながら言った。

「でも、ウーロン茶のペットボトルだけだから、私ひとりでも平気だよ。」

「いや、実は他にも買つてきて欲しいものあつたみたいでさ、それだけ伝えに來るのも何だし、ここまで來たからにはもう荷物持ちくらいするし。」

室岡くんが笑つた。

その大通りは、すぐ斜め前にスーパーの建物が見えるのに、それよりもずっと車道沿いに行かないと信号も横断歩道も無い、ちょっとやつかいな所があつた。

車も頻繁に、左右どちらからもやつてくる。

私と室岡くんは、車の切れ目をひたすら待つた。

「おつ。」

ふと室岡くんが言った。

「今だ。行くよ。」

そう言うと、彼は私の右手首を掴んだ。グイッと引っ張られ、彼と一緒に走り出

ケイ二と引二張られ、彼と一緒に走り出した。

ふたりで息を整える。

ふう、渡れてよかつたな」と南園くんが言う

室岡くんが歩を出した。

その後ろを、私が黙つて付いていく。

室岡くんの後ろ姿は、由にタンクトップ越しに浮き上がる骨のリインと、一の腕の筋肉がとても綺麗だった。
じつにこんなにドキドキするんだらつ

スーパーで買い出しを終え、大きい袋を室岡くんが、小さい袋を私が持つた。

最初、室岡くんが全部持つと言ったけど、それじゃあ本当にただの荷物持ちで嫌だ、と私が言つたら、彼が小さい袋を寄越した。そして、来たときと同じように室岡くんが前を、私が後ろを、間には微妙な間隔を空けて歩いた。

途中で、お互いの好きな音楽や、よく行く店の話などをした。時々後ろを振り返って笑う室岡くんに、口元が綻んだ。

「上手いじゃん。」

振り返り私の方を見て彼は言った。

そう言つて彼は微笑んだ。

「だから作り方見てやつただけなんだってば。」
私が言う。

「それでも美味かったよ。」

そう言って、彼はまた前を向いた。

みんなが言った事と同じものなのに、室岡くんが言つと違うものに聞こえるような気がした。

来た時と違つて、帰りはすんなりと道路を渡れた。

少し残念に思つた。

「理子。」

朋ちゃんが手を振りながら離れたところで叫ぶ。

買つてきたものを手渡し、私も室岡くんも大勢の輪の中に入る。

私は左手で、右の手首をそつと触つてみた。

室岡くんが私の右手首を掴んだのは、ほんの一瞬だった。

それなのに、その時の彼の手の感触が、力強さが、鮮明に思い出された。

ふと見ると、友達と楽しそうに笑い合つ彼が映つた。
胸の奥がドクン　　と鳴つた。

第10話 「君の彼女と私の恋心。」

八月も終わりに近づき、夏休みも残り数えるほどとなつた。私は、夏休みの課題となつていていた美術部の作品を仕上げるため、朝から学校に来ていた。

「なんか、あんなにたくさんあつた割にはあつといつ間に終わっちゃつたね、夏休み。」

その日は一年生の高梨杏子先輩も来ていた、時折言葉を交わしながらもお互い筆を進めていた。

「そうですね。私なんてまだまだ遊び足りないですよ。」

私は言った。

「私もー。でも、来年はそつは言つてられないんだろうなあ。」

高梨先輩が溜め息を混じらせながら言つた。

来年、高梨先輩は三年生。

三年生になれば、夏休みもただの休みではなくなる。

「いいなあ理子ちゃんは。来年の夏休みも遊べて。」

高梨先輩が言つた。

「なんか私、来年今先輩が言つたようなこと言つたよ。」

そう私が言つと、ふたりの笑い声が美術室中に響いた。

ねえ と高梨先輩がふと言つた。

「理子ちゃんは、付き合つてる人とかいるの?」

「いないです。」

私は即座に答えた。

「じゃあ好きな人は?」

そう先輩が聞くと、私は少し戸惑つた。

「それもいないんですよ。」

すぐに出ると思ってた答えを、私は間を置いて言つた。

「ええー。同じクラスに気になる人とかいないの?」

同じクラス

笑ってる室岡くんの顔が一瞬浮かんだ。

それがなぜなのか、私にはわからなかつた。

「本当にいないですって。」

笑い混じりに私が言つ。

高梨先輩はそつとと言つた。

「でもまあ、まだ入学して間もないし、これからだよね。」

先輩は言つた。

課題の絵がようやく完成した頃、時刻はすでに正午をまわっていた。

私はふうと息を大きく吐いた。

「理子ちゃん、完成？」

高梨先輩が聞いた。

「はい、やつと。」

私は椅子の背もたれに体重を預け、クーツと背伸びをした。

「私もこのあと友達と約束があるから、この辺にしどうかな。」

先輩はそう言つと、立ち上がって道具を片付け始めた。

それに続いて私も立ち上がつた。

自分の使つた筆を手に取る。

「それじゃあ理子ちゃん、私はこれで。」

画材道具をケースにしまつている私に、高梨先輩は言つた。

「はい。お疲れさまでした。」

おつかれさまと言つて、先輩は美術室を出て行つた。

高梨先輩が出て行つた数分後に、私も美術室を後にした。

階段を下り、下足場へと向かう。

今日、サッカー部はビデオしてゐるのかな

なんて考えが浮かんだ。

下足場に着くと、自分の下駄箱の扉を開けた。中から靴を取り出し、床にバタン・と落とす。

私はふと外に視線をやつた。

玄関から數メートル先の校門。

そこに、ひとりの男子生徒が立っていた。

それが室岡くんであることに、私はすぐに気がついた。

一
あ
「

私は心の中で呟いた。

室固くんはひとりでいるわけではなかつた。

よく見なれど誰かと話してしまった中

何かに笑っている様子が見られた。

（シナツカ） 邸の人と話していふがどう

同じサムライ部

そ二種は思ひだ

鞄を履き替え 内履きを下駄箱に仕舞い扇を閉めた
室岡くんに「バイバイ」ぐらーと書いてから帰ろうかな

セの腰へ、亥闌に河を渡わた瞬間だった。

誰もいじつた足が自然と止まつた。

道中うまい足

さつきまで室岡くんしか見えなかつたのに、そこに別の学校の
初級の先は横門

制服を着た女子生徒が加わっていた。

彼女は、室岡くんとともに親しげに話している。

室岡くんの肩に触ったり、ワイシャツを掴んだり、そんなことを

繰り返していた。

そして立ち話も飽きたのか、ふたりはどこかへ歩いて行つた。

手を握りながら、方を寄せ合ひながら

「そつか。」

仲の良いカップルが見えなくなつても、じばらくその場を見つめていた私が溢した。

私は歩き出した。

玄関を通り抜け、校門を潜る。

何も考えず、何も思わず、ただひたすら家までの道を歩いた。

目頭だけが熱かつた。

家に着くと、鍵を開けて中に入った。
家の中はシンとしている。

今の時間、お父さんは会社に、お母さんはパーティーに、中学生の弟の裕也ひろやは三日前から、所属している野球部の合宿に行つていて明日まで帰らないため、家には誰もいなかつた。

なんだか妙に寂しくなつた。

靴を脱いで階段を上がり、颯爽と自分の部屋に入る。
窓を閉め切つて出かけたため、部屋には熱気が充满していた。
冷房をつけることなどどうでもよかつた。

持つていた鞄を椅子の上に無造作に置き、私は勢い良くベッドに飛び込んだ。

仰向けに寝転がつて、上だけをじつと見つめた。

見えていたのは天井じゃなかつた。

室岡くんと、室岡くんと話す女の子。

手を繋いで歩くふたりの姿が、日に、頭に焼きついて離れない。

そして、女の子と一緒にいる室岡くん。

嬉しそうに笑つてた。

愛おしそうに手を繋いでいた。

そんな彼を見るのは初めてで、そんな顔をすることを私は知らなかつた。

ただただ彼の姿だけが見えた。

室岡くんのことばかり頭に浮かんで、浮かんで、浮かんで……

涙が出た。

室岡くんのことを考えれば考えるほど涙は溢れた。

室岡くん、彼女いたんだ
いいな、彼女がいて
いいなあ、彼女なんて
いいなあ、室岡くんの彼女になれて

ずっと気づかずについた。気づかないフリをしてきた。
抑えていた感情が、想いが溢れて溢れて止まらない。

好き。

彼が好き。

室岡くんが好き。

第1-1話 「君と机を並べて。」

夏休みが終わり、新学期が始まるとすぐに席替えがあった。黒板に書かれた座席表と、自分が引いたクジの番号を照らし合わせると、私の新しい席は窓側の、前から三番目。視力が飛びきり良いわけではないが、悪すぎるほどでもない私にとっては、無難な場所だった。

「理子、どうだつた？」

朋ちゃんが席を移動して聞いてきた。

私は窓側の席になつたことを伝えた。

「いいなあ。私なんて教卓の近くだよ。」

朋ちゃんが引いたクジは、真ん中の列の左側、前から一番目を示していた。

授業中、教壇に立つ先生の視野に一番入りやすい場所。

「これじゃあ昼寝もできないじゃん。」と朋ちゃんは愚痴を溢した。

そんな朋ちゃんに私は笑つた。

「それじゃあ席を移動してください。」

平原先生が言うと、教室中が椅子を引く音や、机を引きずる音、生徒達の声でざわめいた。

私は新しい席に机と椅子を置いて座つた。

「ふう」と一息ついた。

周りはまだ賑やかだつた。

私の斜め前にはさやかが座つた。

「やつたね理子、近くじやん。」

さやかが言つた。

「ね。すごいラッキー。」

私達は”白眉のとき一緒にやつつ”などたわいない事を話していく。

ふと気がつくと、私の隣に誰かが机を置いた。

私は隣に視線をやつた。

一瞬、呼吸が止まつたように私は固まつた。

室岡くんがいた。

「あれ、隣佐倉？」

彼はそう言つと腰を下ろした。

「あ、うん。」

そう言つて私は手を反らした。

室岡くんを見れなかつた。

「あいつら三人して何気にくつついててさ、俺だけ離れてつまんねえとか思つてたんだよ。」

廊下の方を見ると、林くん、塚田くん、陣内くんが、通路を挟んでそれぞれの席で話していた。

「何気に仁科もいるじゃん。」

さやかを前に室岡くんは言つた。

「何気で悪かつたね。」

室岡くんが笑つた。

「よろしくな、佐倉。」

「うん・・・」

いろんな気持ちが混ざつてる。

ドキドキして、そして胸の奥が痛い。

室岡くんが好きだと思つた。でも彼には彼女がいる。

大丈夫、まだ戻れる

ただの友達に。クラスメイトに。

私は彼を気になり始めただけで、本気で好きになつたわけじゃない。

そう自分に言い聞かせた。

次の授業の時間になり、教科担当の先生が入ってきた。

みんなが一斉に席に着く。

隣の彼も席に着いた。

「寝てたら起こしてくれよな。」

彼が小声で言った。

見ると、ただ微笑んでいた。

またドキドキした。

静かな授業中、この心臓の音が教室中に響くんじゃないかってくらい、

その音は大きく、そして早かつた。

隣に室岡くんがいるというだけで、こんなにも心がざわめく。

彼のことが上手く見れない。

前はこんなじやなかつたのに

とにかく想いだけが溢れた。

もう、戻れないかもしねない。

室岡くんのことが好き

私はもう、それしか考えられない。

第1-2話 「その背中にしか言えない。」

室岡くんと机を並べたのは、ほんの一ヶ月程度だった。

次の私の席は、真ん中の列の後ろから一番目で、由美ちゃんを通路を挟んで隣どおしだった。

私と由美ちゃんは、退屈な授業のときは決まって手紙を交換し合つた。

手紙の内容は、昨日見たテレビの話や、読んだ漫画や雑誌の感想などといったくだらないようなものだったけど、先生の目を盗んでやりとりするスリルが楽しかつた。

室岡くんは教卓の真ん前。

その場所のクジを引いたとき、彼は「昼寝ができないじゃん。」と言つていた。

かつて朋ちゃんが言つたセリフと同じだつたのが可笑しくて、私は笑つた。

「佐倉、交換してくんない？」

と言つた彼に、私は「ヤダ。」と即答した。

前を向くと、室岡くんが見える。

彼は、左手で頬杖をつきながらノートを取ることが多い。伸びてきた後ろの髪がうつとうしいのか、よく襟足をいじつている。

私は彼の後ろ姿ばかり見ていた。

この席の方が、室岡くんのことがよく見えた。
隣の席だった頃は、右側から彼の呼吸を感じた。

でも横目でしか見れなくて、一度、室岡くんが“教科書を忘れたから見せてほしい”と言つてきたことがあった。

その時はお互いの机をくつつけて、私の教科書が境目に置かれた。

教科書なんてろくに見れなかつた。

いつも以上に彼の息遣いがすぐ傍で聞こえて、何よりも彼ひとりのものを共有していふといつとひひどく緊張した。

室岡くんの後ろ姿がよく見えるこの席は、彼についての新たな発見がたくさんできた。

だけど、言葉を交わす機会が減つたような気がする。

前は、授業と授業の合間の休憩時間に何度も話しかをしていて、ふたりでだつたり、時には斜め前のさやかを交えて。

この席になってからそんなことができなくなつて、少し寂しい。でも自分から話しかけに行くなんて絶対できなくて、近づくのが嫌でも後ろでも、私は彼の顔がまともに見れない。

前は見ることができた。

何も知らなかつた頃。

何も気づかずにいた頃。

室岡くんが好きだと思ったときから、上手に彼のことが見れなくなつた。

なんだか恥ずかしくて、切なくて、どうしても目を反らしてしまつ。後ろの席から前の方にいる室岡くんに、何度も何度も何度も、心の中で好きだと云つた。田で訴えた。

室岡くんは、何事もなく退屈そうに授業を聞いている。

こんな風でしか"好き"と言えない。

席が離れていることが、彼との間の微妙な距離が痛い。

室岡くんに彼女がいることが切ない。

絶対「好き」なんて言えないと思つた。

第13話 「聖なる日のパーティー。」

初めて、クリスマスを家以外の場所で過ごした。

夏休みに海に行つたメンバーでクリスマスパーティーをする計画が立てられたのは、冬休み直前の終業式の日だった。

最初にパーティーをしよう、と言い出したのは室岡くんだったようだ。

男子だけでは活気がない、との塚田くんの意見に、それなら気軽に話せる女子がいいということで私達にお呼びがかかってたらしい。

『24日、午後四時に林くんの家に集合だつて。』

というメールが由美ちゃんから届いたのは、終業式の翌日だった。

今日は12月24日

私達女子は四人揃つて林くんの家に向かつていた。

「こんな大勢で押しかけて、林くんの家迷惑じゃないのかな?」

冬休み直前に、眼鏡からコンタクトに買った由美ちゃんが道すがらに言った。

「大丈夫だよ。パーティーは明良んちのアトリエでやるつて言つてたし。」

彫刻を趣味としていた林くんのお祖父さんが、生前アトリエと称して使っていた離れがあり、お祖父さんが亡くなられた今は、宴会場として利用されることが多いと、さやかが話してくれた。

「さすが、よく知ってるね。」

私は言った。

「褒められても嬉しくないんだけど。」とさやかが言つと、私達三人は一斉に笑つた。

「ねえ、プレゼント何にした?」

朋ちゃんが言つ。

クリスマスらしくプレゼント交換も計画されていて、ひとりひとつ

ずつ

プレゼントを用意して持つていくことになつていて。

「女の子どもおしならどんものがいいかわかるけど、男子もいるからね。」さやかが言つた。

自分が選んだプレゼントが誰のもになるかわからないので、男子も女子ももらつて喜ぶものを選らばなければいけなかつた。

「でも」」」で言つちやうと楽しみが減るよ？」

そう私が言つと、「そうだね。」とみんなが口々に言つた。結局、プレゼントの中身は内緒になつた。

林くんの家のアトリエに入ると、すでに男子達は飲んだり食べたりを始めていた。

室岡くんもそこについた。

「なあ、」」」の考えたんだけビビりつかな？」と陣内くんが唐突に言つてきた。

陣内くんの案は、プレゼントが誰のものかわからない方がおもしろいんじゃないか、といつ話だつた。

ただそのまま交換するだけでは、包み紙などで誰が持つてきたかがすぐにわかつてしまつので、黒いビニール袋に入れて中が見えないようにし、帰るときに好きなものをビニール袋」と選んで持つて帰るようにならなか、と陣内くんは言つた。

「それおもしろそうじゃん。」

そう最初に言つたのは塚田くんだった。

「私も。やっぱプレゼントはドッキリがいいよね。」と朋ちゃんが言つ。

みんなその突然の案に賛成だつた。

私も同じ気持ちだつた。

誰かが室岡くんのプレゼントをもらつて、それをすぐ近くで見るのは気が進まなかつた。

私達は各自黒のビニール袋を持ち、ひとりずつ順番に別室に入ると、

そこで用意してきたプレゼントを袋に入れ、そのまま広間へと戻る。その作業は全員が入れ替えるまで繰り返され、最後に別室に入つた

塚田くんが戻つてくると、私達は袋ごとプレゼントを大きなダンボール

箱の中に入れた。

どれも黒いビニール袋。

どれが私ので、どれが室岡くんのかわからぬ。

そうして私達のクリスマスパーティーは始まった。

全員が分担して持ち寄つたジュースやお菓子、サンドイッチなどの軽食類は、みるみるうちに減つていつた。

パーティーは本当に楽しかつた。

気づくと夜の九時になりかけていた。

「もう遅いし、そろそろお開きにしようぜ。」

言い出したのは室岡君だつた。

何人から”もうちよつと”などと言つ声も出たが、あつさりと聞き流されてしまった。

「何が入つてんのかな？」

由美ちゃんが言つた。

私達は、ダンボール箱に入れられた黒いビニール袋を物色していた。どれもみんな同じに見える。

私は手を伸ばし適当な袋を掴んだ。

重いとも軽いとも、小さいとも大きいとも言えないようなものだつた。

室岡くんのだつたらいいのに

「これつて、ひょつとしたら自分のものが当たる可能性あるよな」と林くんが言つた。

そういうえばそうだね
とみんなが口々に言い、そして一斉に笑つた。
笑い声が飛び交う中で、私達は林くんの家のアトリエを後にした。

第14話 「夜道で影だけは寄り添つて。」

林くんの家からの帰り道、外は驚くほど真つ暗だった。

帰る方向は、何気にみんな似たような感じだった。

先頭を朋ちゃんとさやかが、その後ろを私と由美ちゃんが並んで歩き、少し離れて三人の男子がついてきた。

そこには室岡くんもいるのだなつ

私は後ろを振り返つて見ることにならなかったけど、時折隣を歩く由美ちゃんとの雑談の合間に聞こえた彼の声に、耳をかたむけた。

ある程度歩いて、最初にさやかと由美ちゃんと同じ道で別れ、そのあとしばらくして陣内くんと別れた。

残った四人で暗い夜道を歩く。

あ としばらく歩いたところで朋ちゃんが言つた。

「私こっち。」

立ち止まつた朋ちゃんが、十字路の一角を指差して言つた。

「塙田もこっちじゃないっす？」

室岡くんが言つた。

「ああ、うん。井川さんちどの辺?」

「えつと、『ンビニのところ』」

由美ちゃんが塙田くんに説明する。

「そこなら俺通り道だから送るし。」

しばらくして塙田くんは言つた。

「ホント? ありがと。」と朋ちゃん。

「じゃあ私達ここで。またね、理子。」

「うん、気をつけてね。」

私と朋ちゃんはバイバイの手を振った。

「じゃあな、室岡。」と塚田くんが言つ。

室岡くんがおう と言つと、ふたりは通りを歩いて行つた。

残つたのは、私と室岡くんのふたりだけになつた。

「佐倉の家はどのあたり？」

最初に口を開いたのは室岡くんの方だった。

「駅の裏。歩道橋を渡つてすぐくらい。」

そう言つた私に、室岡くんは”そつか”とだけ言つた。

「てゆうか、実は俺んちも駅の方なんだよね。」

室岡くんが言つ。

「どの辺？」と私は聞いた。

「駅前の美容室がある通りを行つた辺り。結構佐倉の家に近いのかも。」

今度は私が”そつか”と言つた。

私の家と室岡くんの家は、意外と近いことを知つた。

「んじや行くか。」

と室岡くんが言つ。

私は「うん。」と言つて、先に歩き出した彼について行つた。

駅までの道は人気が少なく、静かだった。

私と室岡くんは、時々言葉を交わしながら足を進めた。

この時も、私は室岡くんから少し離れた後ろを歩いた。

街頭に照らされて、夜道に微かに私と室岡くんの影が映る。

そのふたつの影が、まるで寄り添つてゐるかのように見えて、それだけでたまらなく私はドキドキした。

あの影のように室岡くんと歩けたりといひのこ

前を歩く彼に、私は心中で「好き」と云つた。

彼はひたすら私の前を歩く。

言葉に出来ないことが歯がゆかつた。

駅通りに出ると、周りは少し明るくなつた。

室岡くんの家は駅前の通りだと云つていたので、おやらく彼には歩道橋を渡る必要はないだらう。

「それじゃあここだ。」

私は言つた。

本当はもっと一緒にいたいけど、そんな事は口に出せず、出してはいけないとも思つた。

彼には彼女がいるのだから

胸が締め付けられて、泣きそうになつた。

ここで泣くわけにはいかない。

だって、田の前に彼がいるから。

「じゃあ、またね。」

そう私は言おうとした。

「やつぱ家まで送る。」

室岡くんが突然言い出した。

私は言葉が出なかつた。

「せつからここまで来たんだし、最後まで送るよ。」と彼は言つた。

「そんな、悪いよ。それにもうそれほど距離もないし。」

歩道橋を渡つて、最初の角を曲がるとすぐに、私の家はあつた。

「それほどの距離じゃないなら、送つてもいいっしょ？」

笑いながらそつと云つて、彼は歩道橋に向かつて歩き出した。

室岡くんの優しさが嬉しい。

でも、胸の奥がギュウつてなるのは変わらなかつた。

嬉しくて切ない

だってその優しさは、私だけのために出たものじゃないから。
相手が私でなくても、彼はきっと同じことを言つただろう。
それが切なくて、また泣きそうになつた。

「ほら佐倉、行くよ。」

室岡くんが言つ。

うん と書いて、私はまた彼のうしろを歩いて行つた。

第15話 「クリスマスの奇跡。」

歩道橋を渡り、家のすぐ近くの角を曲がる直前だった。

「室岡くん、もうここでいいよ。ホントにもうすぐそこだから。私は言つた。

このまま何も言わなければ、おそらく彼は家の前まで来てくれた。私達は付き合つてゐわけじゃない

それを忘れないために、何かを期待しないために、そのための境界線を自分から張ることは大事だと思った。

「ねえ。」

室岡くんがふと溢す。

「このプレゼント、中見てみない？」

プレゼントの入った紙袋を軽く持ち上げてみて、彼は言つた。

「ここで？ 家に帰つて見た方がいいんじゃない？」

私は言つた。

「なんか気になんだよね。俺が何ももらつたかみんなに言つなよ。」

口止めするくらいならこんな所で開かなきやいのに

なんて思つたが、彼はすでに包装紙を開いていた。

中から四角い箱が出てきた。

彼が箱を開くと、中からシンプルなデザインの、ブラウン色をしたマグカップが出てきた。

私は目を見開いた。

「マグカップじゃん、ラッキー。丁度欲しかったんだよね。」

嬉しそうに彼が言つ。

それ・・・と私が言つ。

「それ、私が持つてきたやつ。」

マグカップなら活用性もあるし、男子でも女子でももらつて違和感

がないと思つた。

デザインも、派手すぎずできるだけシンプルなものを選んだ。
それが今、室岡くんの手元にある。

何気なく選んだプレゼント。

誰がもうつかわからなかつたプレゼント交換で、好きな人の手に渡るなんて

「え、これ佐倉の？」

室岡くんが聞く。

私は「クン、と頷いた。

「マジ？ ありがとう、大事にする。」

そう言つて彼は笑つた。

”大事にする” という彼の一言と微笑みで、また胸の奥がドキンと鳴つた。

「佐倉も開けてみたら？ 僕も誰にも言わないからさ。」

彼がそんな風に言つから、私まであけたくなつてしまつた。

私が手に取つた黒いビニール袋の中からは、オレンジ色のリボンで巻かれたオレンジ色の包み紙が出てきた。

リボンを解いて中に入つているものをゆつくりと取り出した。

私がもらつたのは、手の平サイズの白い猫の貯金箱だつた。

「可愛い。」と私は言つた。

あ と室岡くんが言つ。

「それ、俺の。」

一瞬耳を疑つた。

私が用意したプレゼントを室岡くんがもらつて、室岡くんのを私がもらつなんて、こんなことがあるのだろうか。

「何か、俺達つてすげえね。」

そう言つて彼は笑つた。

「ありがとう、私も大切にする。」

そう言つと、室岡くんは”うん”とだけ言つた。

「じゃあね、送つてくれてありがとう。」

「ああ、また学校でな。」

そして私達は別れた。

たつた一言ずつ交わした会話が、一瞬でも恋人じおりになれたような気がした。

角を曲がつて家の玄関のドアを開けて中に入るまで、私は一度も後ろを振り返らなかつた。

彼がまだあの角にいるかもしれない

でも私達はそんな関係じゃないから、きっと彼はもういなしそのどちらも確かめるのが恐くて、後ろを振り返ることなんてできなかつた。

室岡くんからもらつた貯金箱を、机の上にそつと置いた。その貯金箱を見れば見るほど室岡くんの事が思い浮かんで、口元がゆるやかに綻んだ。

私のプレゼントを室岡くんが、室岡くんのプレゼントを私が手にしたことは、奇跡的なことかもしれない。

どちらもその相手のために選んだわけじゃなかつた。

だけど私は、できたら室岡くんの手に渡つてほしいと密かに思つていた。

そして、室岡くんのプレゼントがもらえたらしいのに、とも思つていた。

願いが叶つたわけじゃない。

偶然起こつた出来事でもなければ、奇跡でもない。

これは運命だつて、私はひとり思つた。
そこには何の根拠もないけれど。

クリスマスの夜を好きな人と過ごせた。
それは何よりもプレゼントで、そんな日くらいは運命を
信じてもいいのかもしれない。

第16話 「バレンタインターのチョコ」

「ねえ、理子ちゃんは誰にチョコあげる？」

図書室のカウンターで、隣に座る由美ちゃんが聞いた。

「お父さんと弟にあげるけど。」

「それだけ？」

私は“うん”と答えた。

「理子ちゃん、好きな人とかいないの？」

一瞬ビクッとした。

別に、隠す必要なんてきっとビビリにも無いのだらう。好きな人がいて、それが誰なのか、今ならはつきりと答えが出せる。

だけど、誰かに話すことにはまだ上手にできなかつた。

「いないよ。」と私は言つた。

「由美ちゃんは誰かにあげるの？」

「あ、うん・・・・」

由美ちゃんは少しだけ視線を反らした。

すると、誰かがカウンターに近づいてきた。

「平本先輩！？」

隣の由美ちゃんが突然立ち上がりつて言つた。

「松本さん、ご苦労様。」

そう言つと、眼鏡をかけた男子生徒はチラッと私の方を見た。

「あつ、彼女友達なんです。勝手にカウンターに入れてくれません。」

いつも落ち着いている由美ちゃんが、その時だけは少し緊張している様子を見せた。

「ああ、いいよ。俺もよくそうしてるし。」

「そうなんですか。」と由美ちゃんが言った。

「だいたい朝の当番なんて、そつでもしないと退屈すぎて寝そудよ。」

「そう平本先輩といつ人が言つと、由美ちゃんは可愛らしく笑つた。彼は本を借りたかつたみたいだつた。

嬉しそうに貸し出しの際の手続きをする由美ちゃんを見て、これは と悟つた。

「ありがとうございます。引き続き頑張つてね。」

そう言つて彼はカウンターから離れ、図書室を出て行つた。

「由美ちゃんがチョコあげる人つて、もしかして今の人？」

私は聞いた。

「私、バレバレだつた？」

「ていうか、嬉しそうだつた。」

そう私が言つと、由美ちゃんは照れるように笑つた。

彼は一年生の平本中あたる先輩といつて、由美ちゃんと同じ図書委員の生徒だつた。

委員の仕事をしているうちに仲良くなつたと、由美ちゃんは言つた。

「それで、いつ渡すの？」私が聞いた。

うん と由美ちゃんが言つ。

「先輩、今日放課後の当番だから、その時について思つてゐる。」

私は”そつか”と言つた。

「告白はするの？」

そう聞くと、由美ちゃんは”えつ”と言つて、驚いた表情をした。

「たぶんダメだとは思うけどね。」

「それでも告白するの？」私が聞く。

「だつて、言わないままつて苦しいじやん。」

そう言つて由美ちゃんは微笑んだ。

私はまた”そつか”と言つた。

由美ちゃんが言つよつて、好きな気持ちを言えないのは辛い。

でも、私の恋は好きな人に彼女がいる。

だから、告白してもNOという返事が返ってくることはわかってる。
結果がわかつてると、告白なんてできない。

”好き”なんて絶対言えない。

結果を恐れず告白しようとする由美ちゃんが羨ましく思えた。
室岡くんにチヨコは用意していなかつた。

”義理”としても、”本命”としてもあげられないから・・・

第17話 「ホワイトデーに何を贈る。」

3月1~4日のホワイトデー目前に、室岡くんからメールがきた。
『女つて、ホワイトデーにどんなものもらつたら嬉しい?』
どんな返事を返そうか迷う。

私はしばらく携帯を見つめた。

『突然どうしたの?』と、とりあえず送つてみる。

『バレンタインにチョコもらつたからお返ししたいんだけど、

何をあげたらいいかわかんないんだよね。』

『彼女から?』なんてことを私は聞いてみた。

『うん。あれ、俺言つたっけ?』

『学校の近くで一緒にいるところ見たことあるから。』

やつぱり彼女からもらつたんだ

わかつてたけど何かが気に入らなくて、胸の奥がモヤモヤした。

『で、何もらつたら嬉しいの?』

室岡くんが聞いた。

『何でもいいんじゃない?』と私が送る。

『なんだよー、もつと親身になつてくれよ。』

そんな事言われても・・・

『やつぱ無難にクッキーとかがいいんじゃない?』

私は送信した。

『でもさあ、彼女はわざわざ手作りのチョコとかくれてんのに、俺は
店で買つたクッキーなんてなんか失礼じゃない?』

彼の、そんな風に相手を思いやるところに私も愛しくなつた。
でも、彼が思いやつているのが彼の彼女だといつとこ、胸が
締め付けられた。

『じゃあ、どこかに遊びに行つてもいいんじゃない?』

私が送る。

『え、そういうのでもいいの?』

『物より気持ちだと思う。』と私は送った。

好きな人の恋愛相談にのるなんて、馬鹿みたいだと思つた。だからと言って投げやりにもできない。

室岡くんに嫌われたくなかったから。

せめて、「女友達」という枠の中にはいたかった。

『佐倉ならどんなお返しがいい?』

室岡くんが聞いてきた。

私は・・・

『映画見に行つたり、ご飯食べたりとかしたいな。』

『そんなんでいいの?』と彼が言う。

『うん。一緒にいられる方が嬉しい。』

何かをもらえるのも嬉しいけど、好きな人と手を繋ぎながら、たわいもない話をしてどこかに出かけることに憧れた。

そんな恋がしたかった。

そつか　と室岡くんが送つてきて、メールは終わった。

私はベッドに寝転んだ。

室岡くんの彼女は、どれくらい室岡くんのことが好きなんだろ。

私とどっちが室岡くんのことをより好きなんだろう。

そんなこと比べられるわけないのに、計れやしないのに、

顔も名前も、何ひとつ知らない室岡くんの彼女に嫉妬した。

もし私がチョコをあげていたら、彼はこんな風に悩んだのだろうか。

春休みが終わり、今日から新学期が始まる。いつもより少し遅めに家を出で、私は朋ちゃんと一緒に学校に向かっていた。

「やだなあー、クラス替えなんて。」

隣を歩く朋ちゃんが言った。

今日はクラス発表の日もある。足取りもいつもより少し重め。

「塚田くんとまた同じクラスになりたいなあ。」

クリスマスパーティーの日の帰り道、朋ちゃんは塚田くんと途中から一緒に帰つて以来、彼のことが気になつてゐらし。

「さやかや由美ちゃんとも同じだといいよね。」

私が言つと、朋ちゃんは“そうだよね”と言つた。

【室岡くんとも同じクラスだといいなあ

半ば祈るように私は学校へと足を進めた。

学校に着くと、玄関は人だかりができていた。

貼り出されているクラス割りに、生徒達が注目している。

私と朋ちゃんは、人ごみを掻き分け前へ進んだ。

「理子、また一緒にだよ。やつたね！！」

私と朋ちゃんはまた同じクラスだつた。

井川朋子・・・・・佐倉理子・・・・・

私は目線を下へと下げていった。

”室岡尚志”という名は、私の新しいクラスの中には無かつた。

「あ、塚田くん隣のクラスだ。」

すぐ傍で朋ちゃんが小声で言つた。

「だつたら体育とか、選択授業で一緒になるじやん。」

私達のクラスと塙田くんのクラスは、合同で受ける授業がいくつかあつた。

「あ、室岡くんもいるよ。」

そう朋ちゃんが言つたので、私はもう一度クラス割りの紙に目をやつた。

室岡くんは塙田くんと同じクラスで、私達の隣だった。

少しだけホッとした。

同じクラスになれなかつたのは残念だけだ、隣どおしになれたことがせめてもの救いかも知れない。

「理子、行こう。」と朋ちゃんが言つ。

「うん。」

私達は新しい下足場へ向かつた。

私は高校一年生になつた

「よお、佐倉。」

始業式から何日か後。

その日は木曜日だつた

私は相変わらず朝早く登校している。

室岡くんに会つた。

「あ、おはよ。」

そう言つと、彼は“おお”と返した。

「佐倉、隣のクラスなんだつてな。」

室岡くんが歩きながら言つた。

彼は私の後ろで立ち止まつた。

下駄箱の扉を開け、内履きをバタバタと床に落とす音が後ろから聞こえてくる。

「教科書とか忘れたら貸してくれよな。」

そう言って、彼は私の肩をポンッと叩いた。

びっくりして振り返ると、微笑んでる彼と目が合つた。
ドクンッと心臓が鳴る。

「いたずら描きとかしないでよ。」私が言った。

室岡くんがアハハッと笑う。

「人物にヒゲとか描いて返そつかなあ。」

そんな彼の言葉に、私も思わず笑をこぼす。

「じゃあね。」

そういつて室岡くんは体育館の方へと歩いて行つた。

私のクラスと室岡くんのクラスの下足場は向かい合つていて、
彼の下駄箱は私の真後ろだつた。
それはあまりにも些細なこと。
だけどそんな何気ないことに、私はまたひとり運命を感じた。

第19話 「君と同じものを見る。」

「選択授業、何にするか決めた?」

ある朝、下足場で室岡くんが言つてきた。

「たぶん美術にすると思う。」

私は言った。

選択授業は、音楽・美術・書道の中から一教科だけ選び専攻するというシステムが二年生から組まれていて、個人で自由に決めることになっている。

先生の話によれば、卒業後の自分の進路に合わせて選択するのが望ましいらしいが、それをちつとも考えていらない私は、自分の得意分野でいいと思つていた。

「佐倉美術部だもんな・・・」

下駄箱に寄り掛かりながら話す室岡くんに、私は”うん”と言つた。

「美術楽しい?」

室岡くんが聞く。

「私は楽しいよ。」

そう言つと、彼は”そつか”と言つた。

「俺も美術にしようかな。」

ふと室岡くんは言つた。

「佐倉がいれば教えてもらえそっだし。」

微笑んだ彼が私を見る。

もし室岡くんが美術を選んでくれれば、授業と一緒に受けられる

そんな期待が私の中にできて、絶対美術を選んで欲しいと思つた。

「そんな決め方でいいの?」私が聞いた。

「だつて俺音楽は苦手だし、書道か美術だつたら美術の方が楽しそうなイメージあるじゃん。」

奔放な決め方がいかにも彼らしくて、気持ちよかつた。

「塚田にも言っておかなきやな。」

「塚田くんも美術にするの?」

「たぶん。あいつも俺と似たような考え方だし。」

”そつなんだ”と私は言った。

その瞬間、朋ちゃんに報告することを決めた。

「理子、それホント?」

その日の昼休み、昼食をとつていた最中に今朝のことを朋ちゃんに話した。

「室岡くんはそう言つてだけど・・・」

”塚田君は美術を選択するらしく”とつ話しに、朋ちゃんは興奮を隠し切れずにいた。

「でもそれで美術じやなかつたら最悪じやない?」

朋ちゃんが言つた。

確かに、塚田くんが美術を選ぶかはまだ決まつたことじやなかつた。

「本人に聞いてみた?」

私がそう言つと、朋ちゃんは初め”ええ~”と言つたが、満更でもないみたいでそそくさと携帯を取り出した。

どうやら塚田くんにメールを送るらしい。

塚田くんへのメールを打つ朋ちゃんは、可愛らしく見えた。

”私もあんな風に誰かの目に映つているんだらつか”なんて思つたりした。

塚田くんからのメールの返事はすぐにきた。

携帯を見る朋ちゃんの表情が、見る見る明るくなる。

「理子、塚田くんも美術にするつて!~」

満面の笑みを浮かべた朋ちゃんが言つた。

「でも朋ちゃん、音楽にするつて言つてなかつた?」

「塚田くんが美術にするなら私も美術にするー」

そう朋ちゃんは言つた。

数日後、初めての選択授業の日

私と朋ちゃんは、教材を持つて美術室へと向かつた。
教室に入ると、窓際で塚田くんを交えた数人の男子と
話している室岡くんを見つけた。

ちょっとホッとした。

ふと彼と目が合つた。

微笑んだ彼にドキッとして、私も微笑を返してみた。
少し恥ずかしかつた。

やつぱり室岡くんが好き

改めてそう思つた瞬間だつた。

授業が始まる

席はクラス別になつていて、室岡くんとは随分遠かつた。
時々視線を彼の方へやつてみる。

彼の後ろ姿が見えて、相変わらず左手で頬杖をついている。

ねえ、好きだよ、室岡くん

彼の背中に私は黙つて告白した。

届かない声。伝わらない想い。

一年生の時と変わらない。

彼の後ろ姿にしか、声にならない声で好きと言えない

私達の距離は何ひとつ変わつていなければ、この美術室内に
彼がいることだけで嬉しかつた。

同じ場所で、同じものを私達は見ている。

それだけで幸せだと思えた。

選択授業は週にたつた二回ほどしか無い。

一週間に二回、私は彼と同じ空間にいられる。
美術の時間が、待ち遠しくて仕方なかつた。

第20話 「友達の恋、私の恋。」

「あのやー、理子。」

「「つと?」

もつすぐ夏休み。

夕方になつても汗が吹き出る暑さの中、私は朋ひやんと一緒に帰り道を歩いていた。

「私、甘ひのうと思つんだ。」

隣を歩く朋ひやんが言つた。

「誰に?」

「塚田くんに決まつてんじやん……。」

朋ひやんの一大決心だつた。

「いつ言つの?」

私が聞いた。

「夏休み前には言つつもり。」

”そつか”と私は言つた。

「へ口んでたら慰めてね。」

朋ひやんが笑つて言つ。

「告白するのつて恐くない? フラれたら悲しいじやん。」

私は言つた。

うん と朋ひやんが言つ。

「そりやあ恐いけど、言わなきや伝わんないし、何も

変わんないじやん。」

私はチラシと隣を見た。

朋ひやんの目はとても真つ直ぐで、キラキラしていた。彼女の言葉に、胸が締め付けられた。

私は恐い。

だつて、"好き"って言つても、相手には彼女がいるからフラれるに決まつてゐる。

それに、今の微妙な距離が心地よくて、それを崩してしまつのもまた恐かつた。

「理子はいなの、好きな人？」朋ちゃんが聞く。

「いないよ。」

そつかーと朋ちゃんは言つた。「できたら教えてね。」

そう言つた朋ちゃんに、わたしは“うん”と静かに言つた。

室岡くんが好きーと口に出してしまつたら、押し込めている悲しさや切なさまで溢れ出して、止まらないような気がして恐かつた。

室岡くんに彼女がいるのが嫌

私のほうがずっと室岡くんのことを好きなのに

彼のことが好きだと思つた瞬間からあつた、私の中の濁つたモノ。そんな気持ちが自分の中にあることに、私はずっと口を反らしてきました。

向き合はずにいた。

でないと、好きでいることがもつともつと辛くなりそうだったから。そんな風に、多くのことから逃げてゐる自分が、私は心底嫌いだつた。

夏休みに入つてまだ間もない頃、朋ちゃんから携帯に電話がかかってきた。

『理子、聞いて聞いて。』

朋ちゃんの叫ぶように話す声が、受話器越しに響いた。

『どうしたの？』

私が聞く。

“私、塚田くんと付き合つことになったの…=

どうやら朋ちゃんは、告白してのくをもらつたらしく。

“そつか、よかつたね、おめでと”。=

朋ちゃんが電話の向こうで”ありがとう”と言つた。

朋ちゃんの話によると、塚田くんも朋ちゃんのことが好きだったみたいで、

いわゆる両思いといつやつ。

いいなあ

朋ちゃんが羨ましかつた。

好きな人に好きって言つてもらえて。

両思いになれて。

好きな人に、好きになつてもらえて

私は初めて室岡くんに自分からメールを送つてみた。

『塚田くんと朋ちゃんがくつついたんだつて…！知つてる？…すぐに返事は返つてきた。

『知つてる。塚田にせんざんのうけ話聞かされた。』

『私も似たような感じ。』と私は送つた。

室岡くんから返事は返つてこなかつた。

初めて私から送つたメールは、案外短時間で終わつた。室岡くんとメールをするようになつたのは一年前から。勇気が出なくて、あと一歩がどうしても踏み出せなくて、いつも彼からのメールを待つてばかりいた。

”言わなきや伝わんないじやん”

そう言つた朋ちゃんの言葉が、ずっと頭の片隅にあつた。

それが私の背中をちょっとだけ押した。

自分からメールを送つたことにはすごく緊張した。

だけど、それをやり終えた今、とても心地よいものが自分の体の中にあることがわかる。

勇気を出してよかつた

そんな気持ちになれた。

「好き」と言つ勇気はまだよつと出ないけど、私にひとつは大きな一步でもあった。

ほんの少し、自分を好きだと思えた。

第21話 「私のすきなひと。」

今年の夏休みも、私は美術室にいた。

昨年と同じように美術部からいくつか課題が出され、せりに今年は選択授業の美術からも宿題が出されている。

おかげで私は、暑い中頻繁に学校に通わなければいけなかつた。

今美術室にいるのは四人。

塚田くん、朋ちゃん、私、そして室岡くん。

美術の宿題を、せつかくだから四人でやるつ、という話が数日前に持ち上がり、今に至る。

話を聞いた時、室岡くんと一緒にいられることにただただ喜んだ。けれど実際こうして作業を始めてみると、期待はずれだと思つた。朋ちゃんと塚田くんが、一応手を動かしてはいるものの、延々とふたりだけの世界を創つている。

付き合つてまだ間もないから仕方ないのかもしれないけど、傍にいる私はちつとも集中ができなかつた。

時計を見るとき正午近くだつた。

「私、そろそろ帰るね。」

予定の半分ほどしか進んでいなかつた。

でもこれ以上筆を進める気にはなれなかつた。

「理子、帰つちやうの?」朋ちゃんが言つ。

「うん、お昼ご飯家で食べるつて言つてきたし。」

「そつか。またメールするね。」

「うん」と言つて私はその場を離れた。

美術室をあとにして、廊下で“ふう”と息をひとつ吐いた。

私は階段を下りようとした。

突然後ろから声をかけられ、思わずビクッとした。

振り返ると、室岡くんがいた。

「ビックリしたあー。」と私が言ひ。

「悪い。俺も部活行いりと思つて。」

彼は言つた。

「宿題はいいの?」

「あんな所にこれ以上いられねーって。」

そう彼が言つと、私は“そりだよね”と笑いながら言つた。

私は階段を下りる。

すぐ後ろを室岡くんがついてくる。

私達は下足場へと向かつた。

「でもいいよなあ、ああいつの。」

ふと彼が言つた。

「室岡くんだつて彼女いるじゃん。」

「やうだけど、やっぱ学校違うせいか、すれ違つてばっかでさ。」

そう と私は言つた。

下足場で、私達は背中合わせに靴を履き替える。

バタン と、後ろで室岡くんが下駄箱の扉を閉める音が聞こえた。

「あのや。」と室岡くん。

「何?」と私は振り返り言つた。

「佐倉はいんの?」

「何が?」

「付き合つてる奴。」

私は“いないよ”と即答した。

ふうん と室岡くんが言つ。

「じゃあ好きな奴は?」

好きな人に好きな人を聞かれるつて、何とも微妙な感じだった。

「いるよ。」

隠したくはなかつた。気持ちをわかつて欲しいわけでもなかつた。
"いない"とは言いたくない。

ただそれだけだつた。

「誰?」と室岡くんが聞いてきた。

「内緒。」

私が言つ。

そつか と彼は言つた。

「じゃあ俺、そろそろ行くわ。」

そう言つて室岡くんは行つてしまつた。

彼の遠ざかっていく後ろ姿を、私は玄関で立ち戻りしたまま見てた。

好きな人は、室岡くんだよ

そう言つてしまえばどんなに楽だろうか。

だけど、それを口に出してしまつたら、私達は私達でいられるのだろうか。

今の関係が、微妙な距離がとても心地良い。

それらを崩してしまつことも、壊してしまつこともしたくなかった。

私はまた、室岡くんの後ろ姿に心の中で"好き"と言つた。

第22話 「背中越しの君の体温。」

秋も終わりに近づいて、日暮れが早くなつた夕方には少し肌寒さを感じた。

「佐倉先輩、お先に失礼します。」

活動を終えた後輩が美術室を後にする。

「お疲れさま。」

そう言って私は後輩を見送つた。

今週中に、今描いている絵を完成させたかった。

私はひたすら、絵の具の付いた筆を持つ手を動かした。

それからどのくらいの時間が経つただろうか。時刻もさすがに頃合になり、窓の外は真っ暗だった。絵も大分完成に近づいた。

今日はこれくらいにしよう と思い、私は立ち上がった。

筆を洗い、ケースに片付ける。

描きかけの絵を端に寄せ、鞄を手に教室の出入口へと向かう。美術室には私以外誰もいなかつた。

力チツ

電気を消して、私は美術室を出た。

階段を下り、下足場へと足を進める。

下足場はやけに静かだつた。

靴を履き替え、玄関を通り抜けると、思つていたより風が冷たかつた。

校門を潜り、家へと急ぐ。

チリン、チリン

自転車のベルの音が聞こえた。

私は立ち止まつて後ろを振り返つた。

自転車が私の横に止まる。

「よお。」

「室岡くん・・・」

室岡くんが自転車に跨つたまま声をかけてきた。

「今帰り? 遅くない?」

彼が言つ。

「部活だったから。」

そう言つと、彼は”そつか”と言つた。

「お前、もしかして歩いて帰るの?」

初めて室岡くんに”お前”呼ばわりされた。

「そりだけど。」

「ひとりで?」

「うん。」

そしてお互に黙つた。

あのさ と最初に口を開いたのは室岡くんだった。

「後ろ、乗らない?」

「え?」

突然の出来事で、私はただただ驚くばかりだった。

「こんな暗いのにひとりで歩いてたら危ないって。」

自転車に乗つたままの彼が言つ。

「でも、家そんなに遠くないし平気だよ。」

帰り道は街燈もそれなりにあり、駅通りに出れば人気も多くなる。それほど危険な帰り道ではなかつた。

「いいから。ほら乗つて。」

そう言つた室岡くんに、片腕を掴まれた。

まだキドキした。

私は室岡くんの乗る自転車の後部に、後ろ向きで座つた。

「なんで後ろ向きで座んの？」

後ろから彼が言つ。

「IJの方が気持ちいい。」

前を向いたら今以上にドキドキして、思わず”好き”って言つてしまつんじやないかって思つた。

いつもいつも、後ろ姿にばかり”好き”と言つていたから。

「いこけど、落ちるなよ。」

「落とさなこように漕いでよ。」

私がそう言つと、彼はハハツと笑つた。

そして自転車がゆづくつと動き出す。

横切る風が冷たい。

触れ合の背中と背中。

風の冷たさが、彼の体温をより温かく伝えた。

「ねえー。」

と叫ぶよつよつと叫つてみる。

「なにー？」

背中越しに、室園くんが同じよつよつとび返した。

「重くない？」

「とりあえず漕げるから平気。」

私は”何それー”と言つて、後頭部で室園くんの背中をコツコツと叩いてやつた。

そして私達は笑つた。

前を向いていたよかつた。

背中から伝わる温かさが愛しくて思わず彼を抱きしめてしまいたくなる。

道路に影が映る。

自転車と、それに乗るふたりの姿。その影も背中と背中がぴつたりとくつついていて、少し恥ずかしかつた。

それはまるで、仲の良い恋人どおしのよつよつ。

影だけは彼と恋人どおしになれた。

駅前の歩道橋近くで自転車が止まつた。

「もつここでいいよ。」

本当はもつと一緒にいたいけど

名残惜しみながら私は自転車から降りた。

「気をつけて帰れよ。」

「うん。ありがとね。」

私は勢いよく歩道橋の階段を駆け上がつた。

この時も、私は一度も振り返ることなく歩道橋を渡り、家を目指した。

家に帰つたあとも、背中越しに感じた室岡くんの体温が鮮明に思い浮かんで、恥ずかしくなつて顔がにやけた。窓を開けて空を見てみると、星がたくさん散つていた。室岡くんにとつて、私はきっとこの星のよう、たくさんの中の他とも何も変わらないひとつに過ぎないのだろう。私にとつては太陽のような人。

無くてはならないもので、大事な大事なもの。だけど月のようでもあつた。

ぼんやりと温かく、そして優しい。だけど、見ているとどこか泣きそうになる。

涙がこぼれた。

第23話 「切ない恋に涙が出る。」

元旦に、朋ちゃん・由美ちゃん・さやかの四人で初詣に行つた。日いちが日になんだけにかなり混雑していた。人を搔き分けてなんとか境内へと辿り着いた。お賽銭を投げ入れて手を叩く。

パンツ、パンツ

願いとはひとつしかない。

神様にお願いするくらいならいいと思った。

どうか、室岡くんと恋人どおしになれますように

冬休みが終わつて、今日から新学期。
冬の朝はとにかく寒い。

私は相も変わらず早々と学校へ行く。
校門をすり抜け、玄関を通り下足場に着くと、寒さと静けさだけが広がつていた。

「よお、おけおめ。」

靴を履き替えている最中に室岡くんがやつて来て、私の真横で言つた。

「おめでとう。」と私も言つ。
彼は私の後ろで靴を履き替える。

「餅食つた?」

後ろから彼が言つた。

「食べたよー。」

「俺なんて食いすぎて腹壊した。」

彼がそう言つと、私はアハハと笑つた。

室岡くんは、”笑うなよ”と言つて、グーにした手で私の頭をコツン、と叩いた。

静かな下足場に、私と室岡くんの笑い声だけが響いた。

「そんじゃあな。」と言つて、彼は下足場を後にする。

「理子。」

名前を呼ばれ、肩をポンッと叩かれた。

振り向くと、朋ちゃんがそこにいた。

「朋ちゃん、おはよう。随分早いね。」

「うん、宿題がまだ終わってないから、朝早く来てやないかと思つて。」

「私は”そつか”と言つた。」

朋ちゃんとふたりで教室へ向かつた。

教室は当然のように誰の姿もなく、シン、としていた。

「寒つ。」

と朋ちゃんが言つので、私はすぐにストーブを点けた。それでも

すぐに暖かくなつたりはしないので、私達はそれぞれの席に適当に鞄を置いてストーブを囲んだ。

朋ちゃんも私も何も話さず、ただただストーブに手を翳した。

「あのわ、理子。」

しばらくして最初に口を開いたのは、朋ちゃんだった。

「理子って、室岡くんのことが好きなの？」

「え？」

「さつき下でふたりが話してる時、理子すいへん室岡へんのことが

恋しそうに見てたから・・・

と朋ちゃんは言つた。

自分の気持ちを知られたことは嫌ではなかつた。

室岡くんのことを恋しそうに見ていた

そんな田を自分がしていたかと思うと、少し恥ずかしかった。

「うん……。」と私は言った。

そう と朋ちゃんが言つた。

「「じめんね、いないとか言つて。」

「「う ん、 言いたくなかつたなんならいいよ。」

朋ちゃんのやり気ない優しさが嬉しかった。

「告白はしないの？」

朋ちゃんが言つた。

私は少し黙つた。

「私、恐いんだ。」

「何が？」

「告白したら、今の関係が崩れそうで、あんな風に話もなくなつちやつたりしたら、そっちの方が私は辛い。」

「うん、その気持ちはわかる。」と朋ちゃんは言つた。

それに と私が言つた。

「室岡くん、他の学校に彼女いるから……。」

そう言つと、朋ちゃんは“そ うなんだ”と静かに言つた。

告白なんてできない。

だけど本当は、できないんじやなくてただしないだけだって、自分でもわかつてた。

悲しい想いをしたくなくて、傷つきたくなくて、いろんなものから逃げてきた。

それを受け入れられずに田を反らしてばかりいた。

それじゃ何ひとつ変わりはしないのに、自分から何もしようつとせず、何もかも悲しい恋のせいだからと言つてきた。

だけど、勇気も出なかつた。

押し込めていた濁つたモノがあふれてくる。

一筋の涙がこぼれ、私は泣いた。

隣で朋ちゃんがそっと肩を抱いてくれた。

その優しさが愛おしくて、また涙が出た。

恋をすることは、切ない気持ちになることと常に同時進行だということを、私は初めて知った。

気がついたら、私は高校三年生になっていた。

「離れちゃったね。」と朋ちゃんが言つた。

今年も朋ちゃんとクラス発表を見に来た。

朋ちゃんとは大分クラスが離れてしまった。

隣どおしでもないため、選択授業で一緒になることもない。

「やっぱ三年間一緒にのは無理だよね。」

「そうだね。仕方ないよ。」

私は言つた。

そして私達は、離れた下足場でそれぞれ靴を履き替えた。

「理子、良かつたね。」

階段を上つてる途中で朋ちゃんが言つた。

「何が?」と私が言つた。

「室岡くんと一緒にやん。見なかつたの?」

「忘れてた・・・」

室岡くんとまた同じクラスになれるとは思つていなかつたから、自分がどのクラスかしか見ていなかつた。

「ちゃんとあつたよ。理子のよう下のほうに室岡くんの名前。前。」

「うなんだ」と私が言つた。

室岡くんと同じクラス

私はまた、あの背中に声にならない声で”好き”と言つのだらうか。

「いろいろ辛いかもしないけど、恋ことがあるって。」

そう朋ちゃんは言つた。

朋ちゃんの言つとおりだ。

悲しくて切なかつたりするけど、嬉しいと思える時も確かにある。

この恋はきっと、嫌なことばかりじゃない

そう思つた。

「まあ、何かあつたらいつでも話聞くから。」

そつ言つて朋ちゃんは私の肩をポンッと叩いた。

「うん、ありがとう。」

私が言つと、朋ちゃんは“じゃあね”と言つて、私のよりももつと奥に行つた所にある新しい教室へと歩いていった。

私は新しいクラスの扉を開けた。

知つてる人もいれば、初めて関わる人もいる。

少し緊張した。

「理子ちゃん！…」

突然名前を呼ばれた。

「由美ちゃん。」

すっかりコントクトが馴染んだ由美ちゃんがいた。

「理子ちゃん、同じクラスだよ。」

「えっ、本当？」

どうやら私は本当に自分の名前しか見ていなかつたらしい。

由美ちゃんに会つて少しホッとした。

「私知り合いいなくて困つてたんだ。理子ちゃんがいてくれて良かつた。」

そう由美ちゃんは言つた。

三月の卒業式に、由美ちゃんは一年の頃から想いを寄せていた、平本先輩に告白した。

先輩に彼女はいなかつたけど、先輩は卒業、由美ちゃんはまだ一年高校生活が残つてゐるから、ということで、先輩の答えはNOだつたと由美ちゃんは話してくれた。

結果的に振られてしまつた由美ちゃんは、涙を堪えきれず泣いた。さやかと朋ちゃんと三人でそれを宥めた。

私は、そんな由美ちゃんがいづれの自分に見えて仕方なかつた。

けれども、由美ちゃんは“諦めない”と言つた。

平本先輩と同じ専門学校に進学して、もう一度頑張るらしい。

そんな由美ちゃんが私は羨ましい。

振られても強くいられることが、好きな人に好きって言える勇気があることが。

私はやつぱり、自分が嫌いかもしれない。

由美ちゃんと話していると、出入り口から室岡くんが入ってくるのが見えた。

「あ。」と私は心の中で言つた。

室岡くんと、一瞬目が合つた。

けれど、私も彼もすぐに反らした。

私は由美ちゃんと話し続けた。

ふと、制服のブレザーのポケットに入れておいた携帯が、ブルブルと震えた。

携帯を開くと、"メール受信"の文字が出ていた。
誰だらう

私はメールボックスを見た。

送信者の欄に書かれていた名前は、"室岡尚志"。

室岡くんからのメールだった。

『また同じクラスじゃん。よろしくな。』

すぐ目で見える距離に彼はいる。

そして口でも言えるようなことを、言わなくても別に良いようなことがメールで送られてきて、なんだかふたりだけの秘密ができたみたいな気がして嬉しかった。

『いらっしゃこそヨロシクね。』

私は返信した。

「嬉しいメールだったの?」と由美ちゃんに聞かれた。

なるべく平常心を保とうと思つて居るのに、どうしても伝わって

しまつのかもしれない。

「うん、まあ。」と私は言った。

□元が緩む。

彼の言葉に一喜一憂している自分。

私は、どうしようもなく室岡くんに惚れているみたいだ。

第25話 「電話越しの声」。

ある日の夜、部屋で突然携帯が鳴った。
電話の着信音だった。

携帯を開いて表示画面を見ると、なんと室岡くんからだった。
電話がきたのは初めてだった。

私は緊張しながらも携帯を耳に当てる。

「もしもし?」

私が言つ。

「あ、佐倉?俺、室岡。」

「うん。」

すぐそこに彼の声が聞こえて、とにかく心臓が高鳴る。

「『めんな、こんな遅くに電話とかして。』

「余裕で起きてたから平気。」

彼は”そっか”と言つた。

「あのさ、明日学校終わる時間確か変更になつたじゃん。何時に
終わるか教えてくんない?なんか、それ書いてあつたプリント
失くしちやつたみたいでさ。」

「うん、ちょっと待つて。」

彼は”悪いね”と言つた。

私はプリントを探し出して彼に伝えた。

「ありがと。」

室岡くんが言つた。

「うん。」と私が言つ。

それで初めての電話は終わると思つてた。
あのさ と室岡くんが言つた。

「俺、彼女と別れたんだ。」

一瞬、時間が止まつたような気がした。

「やつ・・・」

室岡くんが彼女と別れた

私にとつては喜んでいいことなのかもしないけど、"嬉しい"

という気持ちはその時ではなくて、何か微妙だった。

「なんで別れたの・とか聞いてもいい？」

私は言った。

ちょっと無神経すぎたかな、と言い終えた後に思った。

「なんか最近すれ違つてばつかだつたんだよね。お互いの都合が全然合わなくて、ふたりで会つこともほとんどなくて。」

私は彼が話すのを黙つて聞いていた。

「あいつのことだんだんわかなくなつてきて、こんなな付き合つてゐつて言えないんじやないかつて思つてさ。だから別れることにしたんだ。」

そうなんだ と私は言った。

今、彼はどんな気持ちでいるのだろうか

そんな事を思つた。

「それに・・・」

ふと彼が言う。

「俺、好きなやつがいるんだ。」

私は耳を疑つた。

「そつか。」と私は言った。

胸の奥にポツカリと穴が開いたような気持ちになった。

「頑張つてね。私、応援するよ。」

そんな事が言いたいんじゃない。

だけど本当のことはどうしても言えなくて、ついつい思つても

いないことを口にしてしまった。

「うん、ありがと。」

と室岡くんは言った。

そしてしばらくお互に黙った。

「それじゃあ、また明日学校で。」

先に沈黙を破った彼が言った。

「うん、また明日。」

私はそういう終えると、耳から携帯を離し電話を切った。

携帯は閉じているのに、もう耳元に声はしないのに、彼が言った言葉が耳の中で響いている。

俺、好きなやつがいるんだ

初めて室岡くんと電話して、大した用じやなかつたけど単純に嬉しかった。

そのまま空さえも飛べそうな気がした。

だけどその一言で、私の背に生えたはずの翼が一瞬にして消えた。

涙があふれる。

彼が私のことを好きならないのに

願いはそれだけなのに、ただそれだけの願いがどうして叶わないんだろう。

好きなことが切ない。

もうどうしようもないくらい室岡くんのことが好き。

そして苦しい。

こんなにも苦しくて胸が痛いのに、彼じやなきやダメなんだ。室岡くんじやなきやダメなんだ。

そしてまた、私の目から涙が頬を伝づ。

彼のことで泣くのは、もう二回で何度目だらう

第26話 「私たちの行き着く場所。」

「疲れたねー。」

教室に戻るまでの廊下で、隣を歩いていた由美ちゃんが言った。

「ホント。しかもかなり暑かつたしね。」

夏休み前の進路説明会は、ただ暑いだけだった。

どこから講師の先生がやってきて、長々と演説を聞かされた。それだけでもしんどいのに、それに追いうちをかけるかのような暑さで、終わつた頃には大半の生徒がうんざりとした表情だった。「理子ちゃんは進路どうすの?」

由美ちゃんが聞いた。

“ん”と私が言つた。

「一応デザイン系の専門学校を考えてるけど、具体的に何がしたいかなんて何も浮かばないなあ・・・。」

現実的に物事を考えなきやいけない立場に自分がいることに、まだ実感が持てずにいた。

「そうだよね。いきなり将来とか決められないよね。」

由美ちゃんが言つた。

進路に関する話は、一年生のときから何度も聞かされた。だけどいつも“まだ先があるから”と先延ばしにしてきた。それを繰り返し、今自分は三年生になつている。もう先延ばしはできない

高校を卒業したら、自分は何処へ行くんだろう。

みんなバラバラの道へ進んで、こんな風に会つて話すこととも少なくなつてしまつたりするのだろうか。

朋ちゃんや由美ちゃんやさやか、そしてあらん室岡くんとも。

いつか来るそんな日が不安で、けれどそれは、全て受け入れなければいけないことだってわかつてた。
でも、何かが悲しかつた。

胸の奥がモヤモヤして、いろんな事を投げ出したくなつた。
じついう気持ちを、億劫つていつのだろうか。

教室へ戻ると、私は自分の席から鞄を手に取り、由美ちゃんの席に行つた。

「由美ちゃん、一緒に帰ろ。」

「じめん、私今日放課後の図書室の当番なの。」

申し訳なさそうに由美ちゃんが言つた。

私は”そつか”と言つた。

「ホントごめんね、理子ちゃん。」

由美ちゃんが顔の前で手を合わせて謝る。

「いいよいよ。委員会の仕事頑張つてね。」

「うん、それじゃバイバイ。」

バイバイ と私が言つと、由美ちゃんは行つてしまつた。

まだ胸の奥がモヤモヤする。

今日は、なんだかひとりで帰りたくない

私は携帯を取り出しメールを打つた。

『一緒に帰らない？』

最初に朋ちゃんに送つた。でも返事はNOだった。

次にさやかに送つた。朋ちゃんと返事は同じだつた。

一緒に帰れるなら誰でもいい

そんな考え、相手には失礼だつけど、その時の私は
ただただそう思つていた。

今はテスト前でもあるため、部活も休み。

まだ空が明るく、暑さも引かない中、ひとり渋々学校を後にした。

胸のモヤモヤは晴れることなく、私は重たい足取りで帰り道を

歩いていた。

どこか寂しくて、そのまま真っ直ぐ家になんて帰りたくなかつた。だけど他に行くところなんてどこにもなくて、余計寂しくなつた。

チリン、チリン

聞き覚えのある音が後ろから聞こえてきて、私は振り向いた。自転車に乗つた室岡くんが近づいてくる。

「お前、そんなボーッとして歩いてつと転ぶぞ。」

私の横で、自転車に乗つたまま彼が言つた。

「ボーッとなんてしてないよ。」

相変わらず室岡くんの顔をまともに見れなかつた私は、視線を下にすらしたまま言つた。

「でもなんか暗いオーラが漂つてたよ。何があつた？」

室岡くんは優しい。でもその優しさが、今は無性に痛い。「何もないよ。ちょっと進路のこととか話されて、ちょっとうつとうしく思つただけ。」

私は言つた。

「ああ、それわかる。なんか気持ちが下向きになるよな。」たわいもない話を彼として、そんな日がずっとずっと繰り返しいいのに、と思う。

「佐倉、もしかして急いでる？」

ふと室岡くんが言つた。

「ううん、別に急いでないけど。」

「じゃあちよつと付き合わん？」

そう言つと、彼は自分の乗つている自転車の後ろを、片手でポン、ポンと叩いた。

乗れ と言つてるんだろうか？

「どこ行くの？」

私は聞いた。

彼はフツと微笑んだ。

「良いトコ。ほら早く乗つて。」

半ば促されながら、私は彼の自転車に便乗した。前と同じように、彼に対して後ろ向きで座った。

「そんじやあ出発進行ー。」

やつぱり、岡ちゃんは自転車を漕がせ始めた。

第27話 「君とふたりでいいかも。」

室岡くんの背中に寄り掛かりながら、遠ざかつていく景色をただ見ていた。

私達は、駅から大分離れた河川敷を通りていた。
背中から伝わる室岡くんの体温、川の水音、そして横切る風が涼しくて、とても心地が良い。

室岡くんはひたすら自転車を漕ぐ。

私はその後ろにじっと座る。

ふたりの周りだけは、ゆっくりと時間が流れているような気がした。

「気持ちいいね。」

ふと私が言った。

後ろから、”うん。”と答える彼の声が聞こえた。
交わす話はたわいもない、どうでもいいような事。
だけどそんな事に彼も私も笑って、それがとにかく幸せだった。
このまま、室岡くんの漕ぐ自転車に乗ったまま、どこへでも行きたいと思つた。

「あ。」

ふと彼が言つて、キュッと自転車が止まつた。

「なあ、坂なんだけど、その座り方じゃ危なくない？」

彼が振り向いて言った。

見ると、なかなか急な下り坂の頂上に自分達はいた。

確かに後ろ向きだと危ないかも

「そうだね。」と言つて、私は一旦自転車から降りもう一度乗つた。
室岡くんと同じ向きで座つた。

すぐ目の前に彼の背中がある。

「じゃあこれで。」

私は言った。

うん と室岡くんが言つ。

そして、彼の手が自転車のサドル部分を握んでいた私の手に触れた。

私の手を握んだまま、彼は自分の腰へと回せた。

「しっかり握まつてろよ。」

室岡くんが言つた。

彼の腰に手を回し、頬が彼の背中に触れる。
どうかこの心臓の音が聞こえませんように

破裂してしまいたくなぐらい、私はドキドキしていた。

ゆっくりと自転車が動き出し、坂道を下る。

最初はブレーキをかけながら、でも途中からは坂の勢いにまかせて一気に走った。

風がものすごい速さで通り過ぎていいく。

「ははっ、すげー。」

彼が笑いながら言つ。

つられて私も笑つた。

風が気持ちよくて、ふたりは笑いが絶えなくて、とにかく楽しかつた。

私は彼の腰をギュッと握んだ。

ふたりでいる時間が心地良くて、彼が愛しくて愛しくてたまらない。

ねえ、君が好きだよ。

その気持ちが、この力強く握った手で伝わればいいの。

こんな時でも言葉にならない。

私の声にならない声は、風に紛れて横を通り過ぎていった。

坂を下り終えても、私たちの興奮はしばらく途まらなかつた。

「すつごい早かつたな。」

室岡くんが言つた。

「なんかジエットコースターに乗つてるみたいだつた。」

「この坂、無料で乗れるジエットコースターかも。」

そう彼が言つと、私達はまた笑つた。

だんだんと陽も傾いてきた。

「そろそろ帰ろつか。」と言う彼に、私は”うん”と呟つた。

彼の腰に手を回したまま、私達は帰路についた。

駅前の歩道橋近くで自転車が止まる。

もつと彼といたい

そんな風に思つたけど、それができない」とくらくなつてた。

私は渋々と自転車を降りた。

「すんごい楽しかつた。ありがとね。」

私は言つた。

「どういたしまして。」と室岡くんが言つた。

「じゃあね。」

そう言つて私は振り返つた。

「あのさ、佐倉　・・・」

歩道橋を上り下りしていた私を、室岡くんが呼び止めた。

「なに?」と言つて、私は彼の方を向きなおした。

「・・・・・」

彼は口を噤んでいる。

「気をつけて帰ろよ。」

そう言つて室岡くんは颯爽と行つてしまつた。

私は、ずっと胸の奥にあつたモヤモヤとしたものが、こいつの間にか

無くなつていることに気づいた。

今はただ、室岡くんと過ごしたわずかな時間が楽しくて仕方なかつたことしか思い浮かばない。

室岡くんの笑い声が、笑った顔が鮮明に浮かんで、それだけでいろんな事が上手くいきそうな、そんな気がした。

第28話 「友達以上、恋人未満。」

「え、室岡くん、彼女と別れたの？」

高校最後の夏休みを過ごしていたある日、朋ちゃんが家に遊びに来ていた。

「うん、そうみたい。」

私は言った。

「みたいって、これはチャンスだよ、理子。」

朋ちゃんが言った。

「チャンスじゃないよ。室岡くん、好きな人がいるって言ってたし。

「え、そうなの？」

うん と私が言つと、朋ちゃんは”そつかあ”と言つた。

少しの間ふたりで黙つた。

しばらくして朋ちゃんが口を開いた。

「ねえ、それって理子のことなんじゃないの？」

「は？」

ベッドに座つていた朋ちゃんが、ベッドを背もたれにして床に座つていた私に近づいてきた。

「だから、室岡くんって理子のことが好きなんじゃない？」

「まさか。そんな事あるわけないじゃん。」

私は思い切り否定した。

「だつて、仲いいじゃん。理子と室岡くん。」

朋ちゃんが言った。

「仲がいいだけだよ。室岡くんは私のこと友達としてしか見てないって。」

「やうかなあー？」

「そうだつて。」

朋ちゃんは納得のいかないような顔をした。

室岡くんが私を好きなんて、そんな事あるわけがない。

彼にとつて私はただの女友達で、それ以上になんてなれない。

そんな、夢物語みたいな展開になんてきつとならない。

私の想いは、きつと届かない

自分で自分に言い聞かせた。

期待をしてしまえば、それがただの自惚れだつたことに気づいた時、悲しくて悲しくてたまらないだらうから。

今年の夏休みは、一度も室岡くんに会つていかない。

去年までは、美術部の課題製作のために何度も学校へ足を運び、そのうちの数回、同じように部活に来ていた室岡くんに会つた。だけど今年は、部からひとつも課題が出ていない。

三年生は勉強や進路の方を優先してほしいといつことで、課題が出されるのは一年生までとなつている。

おかげで学校へ行く理由がひとつも無かつた。

室岡くんを交えて遊ぶような計画もひとつも立つていない。

彼と会う機会は全くなかつた。

メールだけは時々した。

『宿題進んでる?』とか、『毎日暑いよな。』とか、たいした話題じゃないけど、その瞬間だけは彼と繋がつてゐるような気がした。だけど、やっぱりそれだけじゃ不満で、彼に会いたくて会いたくてまらない。

あの声が聞きたくて電話をしようともしたけど、通話ボタンを

どうしても押せなかつた。

あの笑顔が見たくて理由なく学校へ行こうとしたけど、毎回つをするのが恐くて止めた。

室岡くんに会いたい

会いたいって言いたい。だけど言えない

彼を恋しいと思ひ気持ちが募るだけの夏休みだった。

第29話 「朝の教室でふたりきり。」

始業式は月曜日だった
最後の夏休みも終わり、卒業までもうあと半年ほど。
いつの間にか、随分と時が経っていた。

「宿題はちゃんと終わってるの?」

朝ご飯を食べている最中にお母さんが言つた。

「終わってるよ。」と私が言つ。

「姉ちゃん全然手伝つてくんねえんだもん。俺大変だつたんだぜ。」
隣で一緒にご飯を食べている弟が言つた。

「遊び惚けてたアンタが悪い。」

そんな弟に対しキツイ一言を返すと、弟は“なんだよー”と
言つてむくれた。

時計に目をやると、七時一十五分だった。
今日は月曜日。サッカー部の朝練はない。
たまにはちょっと遅くてもいいか
そう思つた。

「「」うそつこま。」

私は立ち上がりてリビングを出た。

階段を上つて一階の自分の部屋へ入ると、ボスッビベッビに勢い
よく座り込んだ。

「ふう。」と一息ついてみる。

私は立ち上がつた。

通学鞄に携帯を押し込め部屋を後にした。
階段を下りリビングの扉を開ける。

「じゃ、私行くから。」とだけ言つてその場を離れた。
真っ直ぐ玄関へと向かい靴を履く。

「忘れ物ない?新学期早々呼びつけたりしないでよ。」

後ろでお母さんが言つ。

「大丈夫だつて。」

靴を履き替えて立ち上がつた。

「行つてきます。」

「いつてらつしゃい」とお母さんが言つ。

少し遅く行こうと思つたけど、なんだか落ち着かなかつた。

やつと室園くんに会える

それがとにかく嬉しくて、じつとなんてしていられなかつた。学校へ向かう私の足は軽やかで、まるで羽が生えているみたいだつた。

下足場は当然のように静かで、下駄箱の扉を開け閉めする音や、内履きを下に落とす音が響いた。

靴を履き替えると、私は教室へと向かつた。

廊下も階段も人気が無くて、自分が独占しているみたいだつた。

「ガラツ。」

私は教室の扉を開けた。

誰もいない。

机の横のフックに鞄を引っ掛け椅子に座る。

そして私は窓を開けた。

朝の涼しい風が入り込んできて、気持ちが良かつた。しばらく、窓から見える景色をボーッと眺めていた。

「ガラツ。」

突然扉の開く音がした。

私は最初、由美ちゃんが来たのだと思つた。

出入り口の方に視線をやると、私は思わず目を見開いた。

「あれ、佐倉じゃん。」

室岡くんだった

今日は朝練は無いはず。

こんな時間に会えるとは思わなかつた。

一番最初に顔を合わせる人が、室岡くんだとは思つてもいなかつた。

「相変わらず早いな。おはよ。」

彼は言った。

「おはよう。」

彼は机に鞄をドサッと置いた。

「なんか久しぶりじゃね？」

室岡くんが言つ。

「うん、そうだね。」

彼の顔を一瞬でも見ただけで、会えなかつた時の不安が一気に吹き飛んだ。

「俺さ、実はまだちょっと宿題残つてんだよね。」

鞄の中を探りながら彼は言つた。

「え、そうなの？ ヤバイじゃん。」

「だから朝早く来てやろうと思つてたんだけど、佐倉がいてくれて助かつたよ。」

私の方を見ながら彼が言つ。

「頼む佐倉、一生のお願い。『写さして…！』

両手を合わせて頭を下げながら彼は言つた。その姿が可笑しくて、私は笑つてしまつた。

「ジュース奢つてくれるならいいよ。」

私は言つた。

「やつたね！…じゃあ今即効で買つてくれるよ。何がいい？」

「こちい」オレ。」と私は言つた。

”オッケー”と言つて、彼は教室を出て行つた。

室岡くんが出て行つた後の教室は、最初のよつにシーンと静まりかえつていた。

まるで室岡くんがいなかつたかのよう。もしかして、彼とさつき会つたのは夢で、本当は彼はまだ学校に来ていらないんじやないかつて、そんな風に思えた。

「佐倉。」

名前を呼ばれた。

出入り口から室岡くんが歩いてくる。

「はい。これでよかつた？」

私の席まで近づいてくると、冷たいいちごオレを差し出した。

「うん、ありがとう。」と言つて私は受け取つた。

「どれ写すの？」私が聞く。

「ああ、英語。」

私は鞄の中から英語の問題集を取り出し、「はい」と言つて彼に渡した。

「答え違つても文句言わないでよ。」

「間違えんなよ。」

「ええ！…」

そう私が言つと、彼は大きく笑つた。教室中に彼の笑い声が響いて、近くに彼の笑う顔があつて、なんだかホッとした。

「じゃ、すぐ写すから。」

そう言つと、彼は私の席を横切つて、私よりも後ろの方にある自分の席へと戻つた。

第30話 「嘘なんてつきたくなかった。」

「夏休みは何してた?」

「後ろの方から彼が聞いた。」

「特に何もしてないよ。ずっと家でゴロゴロしてた。」
窓の外を見ているフリをして、彼の話に言葉を返していた。
ふたり以外この教室には誰もいないといつことに緊張して、
後ろを向けなかつた。

「学校には来なかつたの?」

室岡くんが聞く。

「うん。今年は部から課題が出なかつたから。」

そう私が言つと、彼は”そつか”と言つた。

今、彼はどんな表情をしているんだろう

その答えを知りたくて後ろを向きたかったけど、できなかつた。

「室岡くんは何してた?」

今度は私が聞いた。

「俺?俺はずつと部活だつたよ。夏休み明けの試合が終わつたら
引退だからさ。」

私は”そつか”と言つた。

「試合つていつあるの?」

「再来週の土曜日。」

「出るの?」

「出るよ。俺フォワードなんだぜ。」

「そつなんだ。」と私は言つた。

彼のサッカーをする姿はどんななんだろう

「良かつたら見に来る?」

後ろから彼が言った。

「え、いいの？」

私は思わず振り返った。

後ろで彼はただ笑っている。

ドキッとした。

「いいよ。再来週の土曜、ウチの学校のグラウンドで朝十時に試合開始だから、来れたら来ればいいよ。」

行つても行かなくても、どっちでも良いような感じに聞こえた。

「うん、じゃあ行けたら行くかも。」

私も曖昧な返事をした。

本当は絶対行くつもりでいたけど、上手く言えなかつた。

そして私は、また窓の外を見るフリをした。

後ろから彼の、”うん”という声が聞こえた。

「よしつ、終わり。」

しばらくして後ろから彼が言った。

「佐倉、マジ助かつた。サンキュー。」

そう言つて室岡くんは席を立つ。

「はい、どうもありがとうございました。」

私の席まで来て、彼が問題集を差し出した。

「どういたしまして。」

そう言つて私は彼から受け取つた。

室岡君は振り返り、自分の席へと戻る。

その途中で、彼はふと足を止めた。

「あのさ、佐倉・・・」

私は思わず彼の方を振り向いた。

「なに？」

室岡くんは、少し下を向いていた。

彼が何を言いたいのか、私には全くわからなかつた。

「お前、俺のことどう思つてる?」

突然室岡くんは言った。

「どう思つ? なんて、そんな質問の答えはひとつしかない。

私は、室岡くんが好きだよ。

喉のすぐそこまで出かかっているのに、声にまでならない。

私はまだ、あと一步の勇気が出せずにいた。

私は窓へと視線を移した。

彼を見ているのが辛かつた。

すぐそこまで出かかっている気持ちが言えずにして自分に、

無性に腹が立つ。

私は口を開いた。

「そんなの、友達に決まってんじゃん。」

窓を見ながら私は言った。

室岡くんは、静かに”そつか”と言つた。

その声に、胸が軋むように痛んだ。

「室岡くんはどう思つてるの?」

窓に目を向けたまま私が言った。

少しの間、沈黙が流れた。

「友達だよ。」

しばらくして、呟くように言つ彼の声が聞こえた。

「ふうん」と私は言った。

彼は立ち止まつていた足を動かし、そのまま教室を出て行つた。

私は泣きそうになるのを、必死で堪えた。

”好き”と言えたら、こんな気持ちにならなかつたのだろうか。
確かに気持ちはあるのに、どうしても勇気が出ない。
どうして言えないのか、自分でもわからない。

少しすると、教室に何人かの生徒が入つてきて、私はその中に埋もれた。

由美ちゃんと挨拶を交わし、何氣ない話をした。

そして先生が教壇に立ち、一日が始まる。

その後、室岡くんがいつ教室へ戻ってきたのか、私は確認せずにいた。

”友達だよ。”

そう言つた室岡くんの声が胸を締め付ける。

そんなことわかつてた。当然のことだと思つてた。

なのに、今こんなにも苦しい。

やっぱり私はどこかで期待してて、きっと自惚れていた。

由美ちゃんと話していくも、胸の奥がズキズキと痛かつた。
室岡くんが私のことを好きなんて、そんなこと絶対ない。

何かが音をたてて崩れるような感じがした

第3-1話 「崩れてしまったもの。」

崩れてしまったものはなんだろう
こんなハズじやなかつた。
こんなつもりじやなかつた。

昨日の始業式の朝の出来事が、録画したビデオのように何度も何度も頭の中で再生された。

きっと、私と室岡くんの距離はこのまま縮むことはない。
友達のまま、あと半年ほどの高校生活を過ぐし、そして卒業していくんだろう。

そんな風に私は思った。

今日もまた、下足場には人の気配が無い。
自分の下駄箱から内履きを取り出し、私は靴を履き替える。
今日は火曜日。サッカー部の朝練がある日。
室岡くんに会えるだろうか・・・
玄関を誰かが通つてくるような気配がした。
私は視線をやつた。

「あ。」と心の中で囁つ。

室岡くんだつた。

彼と目が合つた。

フッと、室岡くんがすぐに反らした。

そのまま下駄箱へと近づいてくる彼。

「おはよ。」

私は言った。

「ああ、おはよう。」

室岡くんがポツリとした口調で返す。

そして彼は何も言わなかった。

靴を履き替えている最中、室岡くんは一言も話さなかつた。

「バタン。」と彼が下駄箱の扉を閉める。

そのまま私を横切つて、体育館へと続く廊下を歩いて行つた。いつもなら「じゃあな」とか、「また後で」なんて言葉を置いていつて

くれるのに、今日はそれが無い。

踵をつぶした内履き、パタツパタツという靴音、あの後ろ姿。それらはいつもと何も変わらないのに、何かが違うと思つた。何が違うのかは、わからなかつた。

今朝の下足場での出来事を、私は一日中考えていた。目を反らされたことが、あまり話せなかつたことが、どれも些細なことで大したことじやないのかもしないけど、ひどく気になつた。今日はたまたまそんな気分だったのかもしれない。前向きに思つてもみるけど、すぐに不安にかき消される。何か、気に障るようなことを言つたのかも。だけどそれに思つたることがひとつもなくて、余計不安になつた。授業中でも、お腹ごはんを食べている間でもその事だけが思い浮かんで、こうして帰り道を歩いている今でも、私は上の空だつた。

スッ と、私の横を一台の自転車が通り過ぎる。

自転車は静かに横切り、そのまま私を追い越して行つた。あの後ろ姿を、私が見間違えるはずがない。

いつもいつも、後ろ姿ばかり見ていたから

あの背中にしか、”好き”と言えなかつたから

室岡くんの乗る自転車は、遠くへと消えていった。

私はそれを、ただ呆然と見ていた。

消えていく彼の後ろ姿を。

何も言わず、黙つて通りすぎていつた彼を見ているしか、
私にはできなかつた。

その夜、室岡くんにメールを送ろうと、携帯を開けたり閉じたりした。

メール本文記入の欄を表示画面に出して、取り消しボタンを押す。
何度も何度もそれを繰り返した。

”今日の帰り、何で声かけてくれなかつたの？”

そんなこと言えるわけがない。

彼にとつて私は友達で、友達からそんな風に言われるのには
おかしいと思う。

彼女だつたら不自然じゃないだろうけど、私は彼女じゃないから。
結局メールは送れず、私はベッドに仰向けに横になつた。
上を見上げ、見えたのは天井じゃなく室岡くんの後ろ姿。
自転車に乗つて遠ざかっていく彼。

いつもみたいに、後ろから声をかけてほしかつた。

無言で横切つていかれたことがショックだつた。

それは彼にとつて大したことじゃないのかもしれないけど、そう
思つと余計胸が締め付けられて、涙が出た。

それ以来、朝の下足場で室岡くんと会わなくなつた。

第32話 「ただ君に会いたい。」

もしかしたら、初めて室岡くんのことを知った時から、
彼に惹かれていたのかも、と思う。

あの入学式の日に行われた、ホームルームでの自己紹介
彼の声だけが耳に響いたのも、何か違うものを感じたのも
全て、”好き”になる前兆だったのかもしれない。

ただの友達だと思ってた。

彼に彼女がいるってわかったとき、彼の彼女に嫉妬した。
彼女が羨ましかった。

室岡くんが好きだということに気づいた

彼女がいるから好きだと言えなかつた。結果がわかっている告白
なんて、しても意味ないと思った。

今、彼は彼女と別れ誰とも付き合っていない。
だけど、彼には好きな人がいる。

私達は、よく話し、よく笑つたりしたけど、それ以上にはなれない。
私と彼の間にある微妙な距離。
それがふたりを創つていて、それがあるからこそ私達は私達で
いられるんじゃないだろうか。

上手く言い表せない関係

それにつしか慣れて、それが当たり前だと思っていたのかも
しない。

そんな関係を崩さないように、私はいつも必死になつていた。

ふと田が覚めて、枕元にある田覚まし時計を見ると、八時五分前だつた。

ベッドから降り、部屋を出る。

リビングの扉を開けると、お母さんが食器を洗つていた。

「おはよ。」

私が言つた。

「あら、おはよ。休みなんだかいもつ少し寝てもいいんじゃない？」

お母さんが言つた。

「うん、でもなんか田が覚めちゃつたんだ。」

冷蔵庫からオレンジジュースのペットボトルを取り出し、グラスに注いだ。

「裕也は？」と私が聞く。

「あの子なら、野球部の練習があるつて言つて、朝早く出掛けたわよ。」

「ふうん」と私は言つた。

椅子に座つてオレンジジュースを飲んでいると、お母さんが焼きたてのトーストを出してくれた。

「ジャム、どれにする？」

「ピーナッツバターがいい。」

お母さんが、冷蔵庫からピーナッツバターの入つたパックを取り出しど渡した。

ピーナッツバターの甘い香りがリビングに広がる。

「あなたも部活？」

再び食器を洗い始めたお母さんが、その後ろで朝ご飯を食べている私に振り向かず言つた。

「うん……」

曖昧な返事を口にした。

トーストを食べ、オレンジジュースを飲み干し、ついでにヨーグルトまで口にした。

久しぶりに、のんびりと朝食をとつたよつた気がした。

時計を見ると、八時四十分だった。

「いらっしゃま。」

使つた食器を重ねて、流し台へと運ぶ。

「お皿はどうするの？」

隣で、洗つた食器を布巾で拭いているお母さんが言った。

「まだ決めてないけど、午後までかかるようだつたらコンビニで買いに行くよ。」

そう とお母さんは言った。

「お母さん今日は仕事だから、お皿帰つてくるよつなり、食べられそうなもの冷蔵庫に入つてゐるから、好きな食べていいわよ。」

うん と言つて、私はリビングを出た。

ゆつくりと一階への階段を上る。

部屋に入り窓を開けた。

九月も中旬だといつのに、夏の名残りのような暑さが広がる。外は良い天氣だった。

ここ最近、室岡くんとは口をきいていない。

朝、火曜日でも木曜日でも、それ以外の曜日でも、室岡くんと下足場で会わなくなつた。

教室でも廊下でも、偶然目が合つことがあつてもすぐに彼に反らされてしまう。

メールも送られてこないし、私から送つうどしても何を言えばいいのかわからず、結局堂々通りを繰り返していた。

帰り道で声をかけてもらつどころか、姿さえも見ない。

何かが崩れてきていのだらうか

シャワーを浴びて部屋に戻ると、時刻は九時一十五分だった。
私はしばらく時計を見つめた。

確か今日は

家着としている服を脱ぎ、壁にかけてある制服に袖を通す。
必要最低限のものだけを鞄に詰め、私は部屋を出た。
階段を降りてリビングの扉を開けると、お母さんの姿はそこにはなかつた。

居間を覗くと、掃除機をかけよつとしていた。

「じゃあ行つてくる。」

私は声をかけた。

「あら、 いつてらつしゃい。」

廊下を進み、玄関で靴を履く。

後ろから、掃除機の廻る音が聞こえた。

私はそのまま黙つて家を出た。

学校のグラウンドで朝十時から

その話をした時から、もう一週間ほど経つていた。

今日は、サッカー部の試合の日。

話を聞いたときから、絶対に見に行くと決めていた。

休日でも彼に会えることが、楽しみだつた。

それにもしかしたら、どこか不安定な私達の関係も、修復できるんじやないかと思い、どこか期待を胸に私は学校へ向かつた。

第33話 「恋に疲れた。」

グラウンドの入り口は、校門よりも進んだところにある。

私が着いた時、グラウンドには多くのサッカー部員が、試合直前の準備体操や体慣らしをしている様子だった。

それを見守る観客もまた、多く群がっていた。

観客は男女様々で、同じ制服を着た人もいれば別の学校の人もいる。グラウンドの端にはベンチが置いてあって、何人かサッカー部員が座っていた。

ベンチの真後ろは野球用のフェンスが張られていて、部員とフェンス越し

で話したりするのに最適な場所だった。

そのせいか、その場所は大勢の観客で埋まっていた。

フェンスの手前はすでに人だらけで、入り込む隙間も無い。

私は、フェンスから大分離れた所から室岡くんを探した。

彼は、ゴールのすぐ傍で、何人かの部員と話していた。

そんな彼を、案外あっさりと見つけられたことにひとり浮かれた。

「ピ ッ。」

笛を吹く音が鳴った。

試合開始の合図。

きっと彼は、今私がここにいることなんて知らないだろ？

頑張って、室岡くん。

伝わらないことはわかつて。それでも私は心の中で叫んだ。

私が見ていたのは試合なんかじゃなかった。

走る彼を、ボールを追いかける彼をひたすら見ていた。

初めて、サッカーをしている彼を見た。

私には室岡くんしか見えなくて、ずっとドキドキしたままだつた。

「ピッ。」と、試合終了の笛の音が鳴る。

選手達が皆足を止めた。

どうやら前半戦が終わつたらしい。

相手校と礼を済ませると、選手は散り散りになつた。

部員に紛れた室岡くんが、ゆっくりとベンチへと向かつてくる。ベンチに腰を下ろした彼は、スポーツドリンクを勢い良く口へ運んでいた。

そんな彼の近くに行きたいと思つたけど、ベンチを囲つかのように人が群がつているフェンス前の光景を見て、少し溜め息が出た。「頑張つて。」なんて、ありきたりな声援かもしけないけど、その一言が言いたかつた。

私はフェンスに近づこうとした。

踏み出そうとした足が、反射的に止まる。

フェンス越しに誰かと話す室岡くんが目に映つた。ベンチに腰掛けていた室岡くん。そのすぐ後ろで、フェンスに手をかけながら話す女の子がいた。着ていた制服は他の学校のもの。

胸がギュッとなつた。

あの制服には見覚えがあつた。

忘れもしない。私が、室岡くんを好きだと氣づいた日。校門でじゃれ合つ室岡くんとその彼女を見て、胸が痛かつた。室岡くんはその子と別れたと言つた。確かにそう言つたはずだつた。

なのに

室岡くんとその子が今、フェンスを挟んで話している。

楽しそうに、仲良さそうに

なんであるの子がここにいるの？

別れたんじゃなかつたの？

フェンス越しに話すふたりを、私は離れた場所から見ているしかなかつた。

胸の奥が張り裂けそうに痛い。

ここにはいたくない

私は今すぐこの場所から逃げ出したくなつた。
だけど彼から目が話せなくて、それでこんなにも苦しいのに、
どうしても足が動かない。

ふと、室岡くんがこっちを見た。

その瞬間、まるで金縛りが解けたかのように体が軽く感じ、
私は振り返つて勢い良く走り出した。

グラウンドを出て、校門を通り過ぎ、それにさえも気づかない

ほど一目散に私は走つた。

後ろを振り向くことも、気にすることもせず。
行き先なんてどこでもいい。

あの場所から抜け出せれば、それで良かつた。

どれくらい走つただろうか。

息が切れて、額からは汗が吹き出している。

もうこれ以上は走れないくらいまで私は走つた。

こんなにも死に物狂いで走ることは、体育祭のリレーでも
ないだろう。

気が付けば、帰り道から大分反れた土手沿いに私はいた。
立ち止まつたまま、息を整える。

しばらくすると呼吸も落ち着き、私はゆっくりと目を開いた。
試合はどうなったんだろう

別れたはずの彼女が、室岡くんの出場するサッカーの試合を見に来ていたところとは、もしかしたら三つを戻したのかもしだれない

そんなことはもうどうでもよかつた。

涙が出た。

上手くいかない恋が苦しい。

縮まない距離が切ない。

”友達”以上になりたかった。でも、くだらない事で笑い合つたり、ふざけ合つたりしているその瞬間が心地よくて、そんな関係を崩してしまつのが恐かった。

”好き”と言えないことが悔しかつた。

何も変わつてほしくないと言しながらも、何も変わらないままが悲しくて悲しくて・・・

そんな矛盾に、私はもう疲れてしまつた。
もう、この恋に疲れた

友達のままだつたら、こんな気持ちにならなかつたかもしだれない。
彼のことを好きじやなかつたら、切なくも苦しくもならない。

室岡くんは友達

ただの友達

好きじやない。室岡くんのことなんて何とも思つてない。
そんな風に言い聞かせてもみたけど、やっぱり好き。

私はやっぱり、室岡くんが好き

そしてまた、涙がこぼれた。

第34話 「出会えた」とはまつと運命。」

月曜の朝、七時三十分になつても私はまだ朝食のパンを、のんびりと口へ運んでいた。

壁にかけてある時計に、極力目をやらないようにしながら。「理子、時間いいの?」

お母さんが聞いた。

「うん。もう早く行くのめんどくなつたんだよね。」

私が言うと、”そう・・・”だけお母さんは言った。

「「うちそうさま。」

カップと皿を重ねて流しのシンクに置くと、そのままリビングを後にした。

二階への階段を、いつもならいつもなら走るよう駆け上がるのと、その日はまるで一段一段確かめるかのようにゆっくりと上った。部屋に入つて、ベッドに腰を下ろす。窓の外に視線をやつた。

良く晴れた青空に、うつすらと浮いていた雲をぼんやりと見た。気が付くと八時になろうとしていた。

重たい腰をベッドから上げ、鞄を手に部屋を出た。階段を降りリビングへ向かう。

「じゃ、行つてきます。」

「いつてらつしゃい。」

このやりとりはいつもと変わらない。

玄関で靴を履き替え、私は家を出た。

学校へ行く道を歩いていると、何人かの同じ学校の人には横切られたり、横切つたりした。

朝、学校へ向かう道で多くの生徒に紛れることは、高校に入つて初めての経験だった。

下足場に着くと、靴を履き替えていた最中の由美ちゃんに会った。

「由美ちゃん、おはよつ。」

私は声をかけた。

「あれ、おはよつ。理子ちゃん、今来たの？」

「うん。」

由美ちゃんは少し驚いたような表情をした。

「めずらしけ。理子ちゃんがこんな時間に来るなんて。」

「うん、なかなか起きれなくて……」

自分の下駄箱から靴を取り出し履き替える。

「そういう時つてあるよね。」

隣で由美ちゃんが言つた。

靴を履き替えると、そのまま由美ちゃんと一緒に教室に向かつた。

教室に入つて何人かのクラスメイトと挨拶を交わすと、そのままクラスの生徒に紛れた。

室岡くんの姿を探したりはしなかつた。

しばらくして彼が入つてきて、出入口口に田をやつたりはしなかつた。

そんな態度をとるために私は必死だつた。

本当は、すぐにでも彼の顔が見たかった。

だけど、これ以上私のなかで室岡くんの存在が膨らんでも、きっと悲しいだけだらう。

切ない恋だつた。なんて思い出で残したくはない。

これ以上好きにならないように抑え込む事で、綺麗な思い出として私の中に残つてくれるよつた気がした。

その日、私は一度も室岡くんに視線をやらなかつた。

次の日の火曜日、私は昨日と同じくらいの時間に家を出た。

先日の試合で、サッカー部の三年生は引退。その後の朝練は自由参加となるため、行つても行かなくてもいいといつ話しきを、

随分前に室岡くんから聞いていた。

彼は朝練に行くだろうか

もしかしたら、また決まった曜日には彼と下足場で会えるかもしれない。

だけど、今はもうそんな賭けすら私にはできない。

入学してまだ間もない頃を思い出した。

偶然早く行くことになつた朝の学校の下足場で、初めて室岡くんと話した。

翌日、サッカー部の朝練のない日、私は意味もわからず早々と家を出て学校へ向かつた。

今思えば、室岡くんに会いたかったのかも知れない。

静かな下足場に、私と室岡くんがいることが嬉しかつた。

それはまるで、ふたりだけの秘密のようだつたから。

あの日、教室に行かず体育館に足を運んだのも、室岡くんが

いるかもしぬないと思つたから。

毎日毎日、朝早く学校に行つていたのも、ただ室岡くんに会いたかつたから。

とにかく好きで好きでたまらなかつた。

初めて下足場で会つた時も、クリスマスのプレゼントのことも、
帰り道で声をかけられた時も、全部偶然なんかじゃなくて
私はひとり運命を信じた。

室岡くんに会つたことは、運命だと思つた。

第35話 「恋を綺麗な想いで。」

その日の昼休みに、朋ちゃんに心境を話した。

朋ちゃんは、黙つて私の話すのを聞いてくれた。

「理子はそれでいいの？あきらめちゃつていいの？」

朋ちゃんは言つた。

「あきらめるわけじゃないよ。」

私は言つた。

あきらめたわけじゃない

サッカーの試合で室岡くんと付き合つていた女の子が来ていて、彼と楽しそうに話しているのを見た時は、胸が痛かった。

好きでいるのが辛いと思つた。

でも嫌いになんてなれなくて、そのままおひとすれば余計、好きな気持ちだけが溢れた。

だから、好きだといつ気持ちは今も私の中にある。

でもそれだけ。ただ彼を好きだけ。

これ以上恋に悩むのは嫌だつた。傷つくのが恐かった。

それは逃げなのかもしれないけど、こんな恋の形もあるんじやないかって思つ。

そう朋ちゃんに話すと、彼女は”そつか”と言つた。

「理子がそう決めたんなら、私はそれでいいと想つよ。みつけて」

朋ちゃんが言つた。

「うん、ありがと。」

そう私は言った。

出会ったことは運命でも、この恋は運命の恋じゃなかつた。

それでも、念えてよかつたと思つ。

いつもドキドキして、楽しくて、悲しいこともあつたけど、悪いことばかりじゃなかつた。

もしも、"好き"って言えるあと一歩の勇氣があつたなら、こんな結末にはならなかつたのだろうか？

だけど、"友達"というところにいたからいや、あんな風に笑いあうことができたのかもしれない。

一緒に笑いあい、言葉を交わし、時には君に触れた。

どれも全て一瞬の出来事で、だけども永遠に感じられた。

好きになつたのは高一のとき。

高二になつた今でも、その気持ちは変わらないまま。三年間、ずっと室岡くんのことが好きだつた。気が付けば三年間も彼を好きでいた。

私はこの恋と供に、高校生活を過ごした。

いつか、時が経つて、今を懐かしむときが来たら、私はきっとこの恋のことを思い出す。

そして、"あんな事もあつたなあ"って思つたりするのかもしれない。おそらく一緒に思い浮かぶのは、室岡くんのあの声と、踵を履き潰した内履きから鳴る、パタツパタツといつ音。それからあの背中と、笑つた顔。

私はそれらを思い出して、そつと微笑むことだらう。綺麗なまま、穏やかの気持ちのまま、私は室岡君への恋をひとり、心の中のアルバムに仕舞つた。

好きだよ、室岡くん。

私はアルバムに鍵をかけた。

第36話 「今日は卒業式」

将来何になりたいか、なんて高二になつてもちつとも思いつかなくて、大学に行くほど勉強もしたくなかったし、かと言つてすぐに就職する気も無かつたので、とりあえず自分の得意な分野に進学するのが無難だと思った。

私はデザイン系の専門学校に、すんなりと推薦で合格した。

三年間は本当にあつといつ間だった。

今日は卒業式

一・一年生の頃は式がとにかく長く感じて、ただ退屈なだけだった。けれど自分達のための式となると、卒業証書をひとりひとりが受け取る時間や、校長先生達の話がすごく意味のあるものに思えた。

「理子ちゃん、写真撮るー。」

式のあとの最後のホールームも済み、教室ではあちこちで写真撮影が行われていた。

インスタントカメラを片手に、由美ちゃんが声をかけてきた。

「うん。」

由美ちゃんを交えたクラスの何人かと、入れ替わり何度も何度も写真を撮つた。

持つてきたインスタントカメラのフィルムはどんどん減つていき、あとで朋ちゃんやさやかとも会つつもりでいたので、数枚残して携帯のカメラに切り替えた。

おかげでメモリーは、その写真だらけになつた。

写真を撮つていて、泣いて、笑つて、そしてまた泣いてを繰り返した。

由美ちゃんと一緒に教室を出て、朋ちゃんのクラスに行くと、

「朋子、泣きすぎだよ。」と由美ちゃんが言つ。

「だつてえ」と言つて、朋ちゃんは笑いながら、すでに赤くなり

すいきている目からまた大粒の涙を流した。

そんな朋ちゃんを見て、私まで田頭が熱くなつた。

三人でさやかのところに向かつた。

さやかは大勢の女子生徒達の中でひたすら笑つていた。

だけど目はやつぱり赤かつた。

さやかのクラスのひとりの女子生徒にシャッターを押してもいつも

よう頼むと、私達は四人で並んだ。

「こんな目で映るつてちょっと嫌かも。」

朋ちゃんが言つ。

「みんな似たようなもんだからいいんじゃない？」とさやかが

言つと、私達は一斉に笑つた。

こんな風に四人で笑うのはきっと、一年生のとき以来だと思つ。何枚も何枚も四人での写真を撮つて、インスタントカメラのフィルムは、いつの間にかあと一枚だけになつていた。

なにかが頭を過ぎつた。

私は、フィルムを一枚だけ残すことにした。

「みんなバラバラになっちゃうんだね・・・」

ふと由美ちゃんが言つた。

春から、由美ちゃんは平本先輩のいる専門学校に、朋ちゃんは短大に、

さやかは県外に就職が決まつていて、

「あんまり会えなくなるね。」

私が言つ。

同じ高校で、同じ場所にいつもいたのに、それぞれ別々の道を行かなければいけない時がようやく來た。

そんな日が来ることを嫌だと思ったこともあったけど、どんなに嫌でも、そうしなければ誰も前に進めない。

そんな風に私も、いつしか思えるようになっていた。

「時々会おうね。連絡もしようね。」

と由美ちゃんが言つと、自然と涙があふれた。

四人とも涙をこらえきれず、私達はひたすら泣いた。泣くに泣いて、四人で教室をあとにした。

下足場から玄関の外を見ると、大勢の下級生が待機していた。卒業する三年生を最後に見送るために、長い時間待っているのだ。自分もああやつて、先輩達を見送った。

下足場で靴を履き替えるのも、今日が最後。

そんなことを思いながら、私は靴を履き替えた。玄関を出るととにかく人の波で、どう通り抜ければいいかわからないほどだった。

奥の方に美術部の後輩を見つけた。

後輩達も私に気づいたのか、大きく手を振っている。

「じゃあ、私ここで。」

私は言つた。

「またね、理子ちゃん。元気でね。」と由美ちゃんが言つ。

「うん、由美ちゃんもね。」

と私が言つて、また泣き出してしまった由美ちゃんを、肩を撫でながら私は宥めた。

「四月まで遊びまくろつよ。」

さやかが言つた。

「メールするね。」と朋ちゃんが言つ。

これが最後の別れじゃない。それだけを私は信じた。

「じゃあね、みんなまたね。」

やつは私はみんなと別れた。

第37話 「やみな。 ありがと。」

美術部の後輩からは花束と、それぞれ一言ずつ言葉を書いた色紙が渡された。

受け取った時からすでに目頭は熱くて、後輩の前で泣くのは少し恥ずかしかったけど、我慢できず結局涙があふれた。

卒業証書に卒業アルバム、後輩からもらつた記念品。両手いっぱいに高校生活を終えた証を持つて、私は家への帰り道を歩いていた。

この道を歩くのも、今日で最後
見慣れた景色も思い出へと変わる。

学校から家までの一步一歩が、とても愛しく思えた。

「佐倉……」

うしろから声がした。

最初、誰だろう・とも思ったけど、こんな風に私のことを呼ぶのはひとりしかいない

足を止めて振り返った。

室岡くんが走つてくる。

いつもあるはずの自転車は無かつた。

最後に室岡くんに会えてよかったです。

さよならが言える

”室岡くん、二年間仲良くしてくれてありがとうございました。”

”海に行つたり、クリスマスパーティーをしたり、自転車を一人乗りしたりと、本当に本当に楽しかった。”

”またいつか会えたら、その時も笑つて過げせるとこいね。”

さよなら、室岡くん。今まで本当にありがとうございました

最後は”ありがとう”と言いたかった。時が経つて再び会えた時に、心から笑つて会えそうな気がしたから。

「佐倉が帰つていくの見て、急いで追いかけてきたんだ。呼吸を乱しながら彼は言った。

「私に何か用でもあるの？」

私は聞いた。

「俺、佐倉に、どうしても言いたい、事、が、あつて・・・」
「ハア、ハア」という息遣いを交えながら室岡くんが話す。
私が「なに？」と聞くと、室岡くんは”ちよつと待つて。”と言つて、頭を下げて息を整えた。

そんな彼の姿を、私はすぐ傍でただじつと見ていた。

しばらくして落ち着きを取り戻した彼は、ゆっくりと頭をあげた。

そして真つ直ぐ私を見た。

少し照れくさかつたけど、その目はあまりにも力強くて、私は目を反らせなかつた。

室岡くんがゆっくりと口を開く。

今さら彼は、何を言うのだろう

「俺、
佐倉が好きだ。」

第38話 「ずっと好きだった。」

室岡くんとは”友達”で、それ以上にはなれないと思つてた。どんなに想つても僕く散つてしまつとわかつてたから、”好き”なんて言えなかつた。

好きな人が、自分を好きになるそんなのは夢物語だと思つた。

「一年の時に話すようになつて、ずっと氣になつてたんだ。付き合つてた彼女と別れようと思つたのも、佐倉のことが好きだつたからなんだ。」

私は呆然としながら彼を見ていた。

足が石になつたみたいに動かない。

頭の中は混乱していて、いろんなものがグルグル回つてゐみたいだつた。

「嘘だ・・・。」

私は言つた。

「嘘なんかじやねえよ。」

彼が言つ。

「俺は、ずっと佐倉が好きだつた。」

そんな言葉が聞けるとは、思つてもいなかつた。

真つ直ぐな目で私のほうを見て、室岡くんは言つた。今にも泣きそうになるのを、私はグッと堪えた。

何か言わなくちゃいけないのに言葉が出ない。声にならない。

「ごめん、やつぱ迷惑だよな。いきなりこんな事。」

彼は私から少し目を反らした。

そんな事ない。すごく嬉しい

だつて私は、ずっとそんな口を夢見ていたんだから
言いたいことがあるのに言葉にならない。

こんな時でも、私は勇気が出せないの？

「それだけ言いたかったんだ。ごめんな、引き止めて。」
そう言うと、室岡くんがスッと私を横切つていく。

私は何も言つていない。

このまま本当にいいの？

私は自分に聞いた。

鍵をかけたはずの心のアルバムがそつと開く。
私は振り向いた。

「待つて！！」

少し離れた所で彼は立ち止まつた。

抑えていた気持ちが、涙と一緒にあふれる。
ゆっくりと室岡くんが振り返つた。

涙で歪んで、彼の姿が上手く見えなくなつている。

「私も好き。」

初めて室岡くんに正面から好きつて言つた。

ずっと伝えられなかつた気持ちが、ようやく言葉にできた。

三年分の想いを込めて

彼の手が私の頬にそつと触れると、指で涙を掬つた。

「私もずっと、室岡くんが好きだつた。でも言えなかつたの。
友達としてしか見られてないと思つてたから。」
涙で視界がぼやける。

突然、体がフワリと軽くなつたような気がした。

気が付くと目の前に室岡くんの胸元があつて、私は彼の腕の中に閉じ込められた。

思わず、両手に抱えていた荷物が手から離れた。

耳のすぐ傍で、室岡くんの心臓の音が聞こえる。

それは驚くほど早く、とても愛おしかった。

「俺だつて、友達としてしか見られてないと思つてたよ。」

上方から室岡くんの声がする。

「いきなり話してくれなくなつて、嫌われたかと思つた。」

彼に抱きしめられたまま、私は言つた。

「あれは、友達だつて言われてすげーショックで、しかも俺もつい友達だつて言つて後悔してたんだ。俺にとつてはそうじやなくとも、お前にとつて俺は友達なんだろうなつて。」

「『めんね、私、あんな事言つつもりじやなかつたの。』

なのに・・・」

また涙が出た。

「もういいよ。わかつたから泣くなつて。」

そう言つと、室岡くんが私の頭を優しく撫でた。

それだけでも泣きそうになつた。

「試合、見に来てくれてすげー嬉しかつた。なのにいきなり帰るんだもんな。」

室岡くんが言つた。

「だつて、彼女だつた口と話してたから、戻つ戻したんじやないかつて思つて・・・。」

ハハハツと室岡くんが笑う。

「あいつの学校と試合してたんだよ、俺ら。それに、あいつの新しい彼氏もサッカー部で、そいつを見に来たんだつてさ。」

そうだつたんだ

あの時の不安が、悲しみが、一瞬にして溶けたような気がした。

「俺も、たぶん辛い想いさせたと思う。『ごめん。』

私は大きく首を横に振った。

室岡くんの制服が汚れてしまつ そう思つても涙はとめどなくあふれた。

私を抱きしめる彼の力が、ギュッと強くなつた。

嬉しくて愛おしくて、自然と手が彼の背中へと伸びた。

「なんか俺ら、かなり遠回りしたのかもな。」

室岡くんが言つ。

「うん・・・。」

私達はずっと遠回りばかりしていた。だけどきっと、意味のある遠回りだつたのだろう。

だからこそ今こんなにも彼が近くに感じる。

そのための遠回りだつたのかもしれない。

そつと、私を抱えていた腕が解けていく。

第39話 「これからはふたりで。」

「泣くなよ。」と室岡くんが言った。

「だつて……。」

そう言つと、彼は制服の袖で私の目元を拭つた。

「汚れるよ……。」

そう言つた私に室岡くんは、「もう着ないからいこよ。」と言つた。

ずっとぼやけていた景色が鮮明になつて、田の前にいる室岡くんのことも良く見えた。

彼は微笑んでいた。

なんだか恥ずかしい

「夢、見てるみたい。」

ずっと夢のような心地だつた。

いつか覚めて、いつもの日常に戻るんじやないかつて。

ギュッ

室岡くんが私の頬をつねつた。

「痛い。」と私が言つ。

ハハハつと室岡くんが笑つた。

「夢じやないだろ。」

微笑みながら彼が言つ。

私が見ているのは現実の出来事で、夢なんかじやない。なんだか可笑しなつて、ふたりで同時に笑つた。

こんな結末になるなんて

室岡くんはまた私を真つ直ぐ見た。

「遠回りしてきた分、これからはふたりで並んで歩こう。理子。」

彼は言った。

私は”うん。”と言った。

室岡くんの顔が近づいてくる。

自然と私も目を閉じた。

ふたりの唇と唇がそつと重なった。

「そういうえば、進路つてどうしたの？」

隣を歩く室岡くんに私が聞いた。

「理子と一緒に。」

そんな彼の言葉に、思わず”えつ”と口に出す。

「なんでそこにしたの？」私は聞いた。

「俺も美術が楽しくて、もつと続けたくてさ。それでビーチせ

なら一緒にどこ行きたいって思つて。」

「よく私の行くところわかったね。」

「井川に聞いた。」

そう彼は言つと、私の方を見て笑つた。

私は愛しくて愛しくてたまらなくなつて、繋いでいる彼の手をギュッと強く握つた。

こんな風に室岡くんと手を繋いで、室岡くんの隣を歩けるなんて、こんな時が訪れるなんてあの頃は思わなかつた。

「ねえ、写真撮らない？」

私がふと言つた。

「今？」と彼が言つ。

「うん。ちょうど一枚残つてたの。」

そつ言つて私は鞄の中からインスタントカメラを取り出した。

「じゃあ俺がシャッター押してやるよ。」

私は彼にカメラを渡した。

室岡くんが左手に持ったカメラを上に高く掲げる。右手は私と繋いだまま。

ふたりの頬と頬が寄り添う。

「いくよ。はい、チーズ。」

パシャ という音がして、シャッターがきられた。

「ちゃんと写ってるかな?」

私が言う。

「俺が撮ったんだから大丈夫だつて。」

そう言って室岡くんは笑った。

そんな彼につられて私も笑った。

もしかしたら、フィルムの残りがあと一枚になつたと気づいたあの時過ぎた何かは、このためだつたのかもしれない。そんな風に私は思った。

心のアルバム鍵はどこかへ行つてしまつた。

アルバムにしまう思い出が増えたから。

時には悲しいこともあるかもしない。恋はきっとそういうもの。だけど、彼とならいいろんな事を乗り越えていけるような気がした。今までは、私の室岡くんへの想いをしまつてきた。これからは、私と室岡くんふたりの想いが收められる」とだりつ。

私達は手を繋いで、肩を寄せ合つて、帰り道を歩いた。

私は、彼の彼女になれた。

第40話 ハピローグ「運命の恋。」

専門学校に入学して、早くも一ヶ月が経とうとしている。知らない人たちばかりで最初は不安にもなったけど、今では友達もそれなりにできて結構充実している。

『聞いてよ理子、ひどいんだよ。洋輔つてば・・・』

朋ちゃんからの塚田くんに対する愚痴が延々と書かれたメールを、私は学校の玄関で立つたまま読み返していた。あのふたりも、しょっちゅう喧嘩はするものの、何とか仲良くやっているらしい。

そんな関係に少し憧れた。
私は返信メールを送った。

ポンッといしろから頭を軽く叩かれた。

「お待たせ。」と彼は言つ。

「遅いよ。」

「ごめんごめん、話が長引いてさ。」

そう彼が言うと、どちらからともなく自然とふたりの手は重なった。手を繋ぎながら、私達は学校の敷地内にある駐輪場へと向かった。
「さつき朋ちゃんからメールが来たよ。」

私は言つた。

「井川のやつ、何だつて？」と彼が言つ。

「また喧嘩したんだつて。」と私が言つと、彼は大きく笑つた。

「理子、落ちんなよ。」

自転車の後部に座る私に向かって彼が言つた。

「落とさないよう漕いでよ、尚志。」

そう私が言つと、彼は”了解”と言つてペダルに足をかけてゆっくりと自転車が動き出した。

彼の腰に手を回して、彼の背中に頬をくつつけた。

私たちの通う専門学校は、地元の駅から電車で四つ田の駅を降りて自転車で一十分ほどのところにある。

駅まで電車で来て、駅から学校まではいつも、私は彼の漕ぐ自転車の後ろに座つて通っている。

帰りも同じ。

彼の自転車に揺られながら、駅までの道を進んだ。

いつの間にか、彼のことを”尚志”と呼ぶようになった。
まだ少しきこちなかつたり、照れくさかつたりするけれど、そんなこともまた愛しく思えた。

彼の腰に回していた手の力を強める。

「理子、苦しい。」

そう彼が言つと、私は思わず笑つた。

ふと、高一の時の担任だった平原先生の言葉を思い出した。

”神さまのいたずら”

あの日、神さまのいたずらで自己紹介をすることになつた。そのおかげで、彼の声に惹きつけられた。
だとすると、この恋も神さまのいたずらなのだろうか？

いたずらなんかじゃない。

これは運命。

この恋は運命。運命の恋。

第40話 ハローケ「運命の恋。」（後編）

非現実的で、ドラマのような漫画のような恋なんて、所詮は夢物語と思われがちかもしれないけど、この作品を通して、ありふれた日常の中でも運命的な、素敵な恋が見つけられる事が伝わればと思います。

ここまで読んでいただけた本当にあつがいいと思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5181c/>

高校生の恋。

2010年12月8日02時12分発行